

佐久市埋蔵文化財

年報 4 平成6年度

佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財

年報 4 平成6年度

佐久市教育委員会



寺添遺跡航空写真



八風山VI遺跡



八風山VI遺跡石槍石器群B地点（スポット1～3）



八風山VI遺跡石槍石器群B地点（スポット4）



八風山VI遺跡B地点の石槍



榛名平遺跡Ⅲ地区



榛名平遺跡 3号墳石室

# 目 次

## I. 組 織

1 組 織	2
2 体 制	2

## II. 事 業

1 調査事業費	6
2 保護・保存事業	6
(1) 現状および指定保護・保存	6
(2) 記録保存	6
3 普及・公開事業	8
4 分析・鑑定	8
5 刊行図書	8

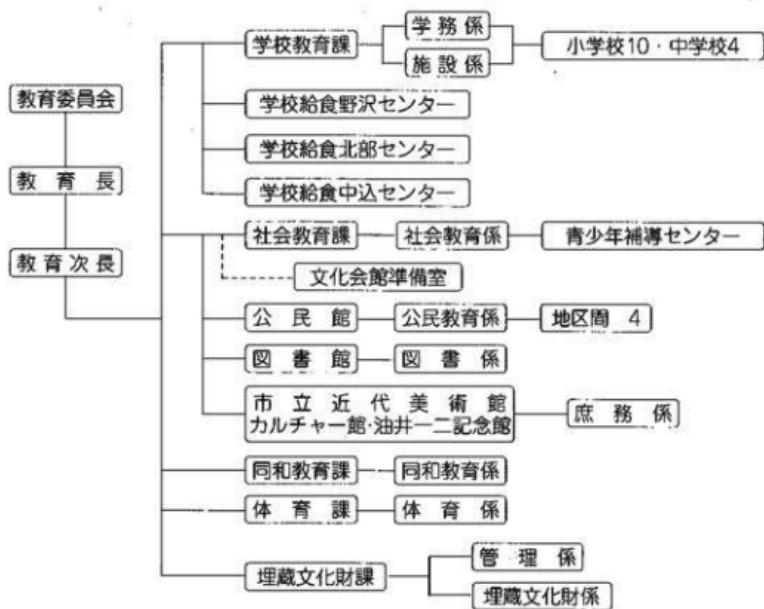
## III. 調査概要

寺畠遺跡群寺畠遺跡	11	寺添遺跡	25
上芝宮遺跡Ⅲ	14	中塙敷遺跡	27
下曾根遺跡Ⅱ	16	棚畠遺跡	29
枇杷坂遺跡群上久保田向遺跡Ⅶ	18	権現平遺跡・池端城跡	31
長土呂遺跡群聖原遺跡Ⅳ	20	蛇場B遺跡Ⅲ	34
櫟名平遺跡	22	八風山遺跡群	36

## IV. 清水田遺跡調査報告

I 組 織

## 1 組織



## 2 体制

(事務局)	佐久市教育委員会 埋蔵文化財課
教 育 長	大井 季夫
教 育 次 長	奥原 秀雄
課 長	戸塚 満
管 理 係 長	谷津 恭子
管 理 係	田村 和宏
埋蔵文化財係長	草間 芳行
埋蔵文化財係	林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司、小林 眞寿、羽田野卓也、富沢 一明、上原 学

調査主任 佐々木宗昭、森泉かよ子  
調査副主任 堀 益子  
調査員 相澤今朝義、浅沼ノブ江、阿部 和人、荒井 かつ、荒井 豊平、  
荒井 利男、荒井ふみ子、安藤 静、飯沢つや子、五十嵐勝吉、  
池田 勝子、磯貝 はな、市川 愛子、市川チイ子、井出 愛子、  
井出つねじ、井出徳四郎、伊藤 理、井上 行雄、岩下 吉代、  
岩下とも子、岩下 文子、上原 幸子、碓氷 健、江原 富子、  
江元 好雄、遠藤しづか、大井 キセ、小田川 栄、小田川時江、  
柏原 松枝、金森 治代、川多アヤ子、木内 明美、木内 英一、  
工藤しづ子、工藤 靖吉、倉沢袈裟男、倉見 渡、棚沢三之助、  
黒沢 三男、高地 正雄、神津さよ子、神津ツネヨ、神津登久子、  
神津 春代、神津よしの、小須田 伸I、小林 幸子、小林 静江、  
小林 妙子、小林 立江、小林まさ子、小林 陽子、小林よしみ、  
斎藤 義男、桜井 牧子、佐藤 愛子、佐藤けさ子、佐藤 玉枝、  
佐藤みづ江、篠崎 清一、篠原 昭子、清水佐知子、清水 六郎、  
白井おくに、鈴木 多比、関口 正、高橋サチコ、高橋 ふみ、  
竹重 祐夫、武田 千里、武田まつ子、角田 すい、角田すづ子、  
角田 時、角田トミ工、角田 良夫、東城 友子、東城 幸子、  
徳田 代助、樋田 咲枝、中嶋 角治、中嶋きねよ、中島 文子、  
中嶋 良造、並木ことみ、成沢 富子、新津 幸雄、西村 里子、  
中條 しげ、中條 繁子、萩原 宮子、羽田香里、橋詰 勝子、  
橋詰けさよ、橋詰 信子、花岡美津子、花里香代子、花里四之助、  
花里三佐子、花里八重子、原 キミ工、星野 良子、細萱ミスズ、  
堀筆 澪子、堀込 成子、堀筆 因、堀筆みさと、真鳴 保子、  
増野 深志、丸山 澄、水間 雅義、三石 和子、宮川百合子、  
武者 幸彦、村松 とみ、茂木とよ子、桃井もとめ、森泉 鈎一、  
柳沢千賀子、柳沢ちなみみ、柳沢豊志子、山浦 豊子、山口 丑男、  
山崎 直、山崎平八郎、山田 幸枝、吉原 照美、依田 みち、  
和久井義雄、渡辺久美子、渡辺 倍男

## II 事業

## 1 調査事業費

平成6年度埋蔵文化財調査事業費	予 算 額	353,706,000円
	決 算 額	353,510,665円
	受託事業費	250,295,000円

## 2 保護・保存事業

### (1) 現状および指定保護・保存

一本松古墳群第3号古墳（佐久市大字下平尾字一本松）保存。

### (2) 記録保存

#### 1) 概要

開発原因者	調査実施数					報告書 刊行
	発掘	試掘	立会	整理	計	
県 市 等	国・県補助				1	1
	長野県土地開発公社	2	2		1	5
	長野県			1		1
	佐久建設事務所	1	3	2		6
	佐久下水道組合				1	1
	佐久市土地開発公社	1	2		1	4
	佐久市	4	7		1	12
個人・民間業者		4	23	4	1	32
合 計		12	37	7	6	62
						8

## 2) 發掘調查

NO	遺跡名	所在地 面積	備考
1	寺畠遺跡群 寺畠遺跡	佐久市大字豊久尾字下原591他 1,500m <sup>2</sup>	住2(弥生・平安) 佐久市埋蔵文化財調査報告書第40集『寺畠遺跡』
2	上芝宮遺跡Ⅲ	佐久市大字長土呂 630m <sup>2</sup>	住4(古墳～平安)
3	下曾根遺跡Ⅱ	佐久市大字小田井 866m <sup>2</sup>	住8(古墳～平安)
4	上久保田向遺跡Ⅷ	佐久市大字岩村田字上久保田向 458m <sup>2</sup>	住2(平安) 佐久市埋蔵文化財調査報告書第41集『上久保田向遺跡』
5	長土呂遺跡群 聖原遺跡Ⅶ	佐久市大字長土呂 13,000m <sup>2</sup>	住87(古墳～平安), 据立67, 土坑99, 黏土坑4
6	櫻名平遺跡	佐久市大字根岸字櫻名平 2,460m <sup>2</sup>	住100以上(绳文～中世), 土塙墓・火葬墓(中世)
7	寺添遺跡	佐久市大字三塚73-9 2,128m <sup>2</sup>	住29(古墳～中世), 据立6, 土坑3, 井戸4
8	中巣敷遺跡	佐久市大字平賀字北耕地5365-2 139.5m <sup>2</sup>	住4(平安), 土坑3 佐久市埋蔵文化財調査報告書第39集『中巣敷遺跡』
3)	整理調査 畠畠遺跡	佐久市大字上平尾字畠畠 3,700m <sup>2</sup>	住6(绳文・平安・中世), 据立1, 土坑6
10	権現平遺跡 池端城跡	佐久市大字新子田権現平他 6,500m <sup>2</sup>	住34(绳文～中世), 据立1, 土坑57, 井戸2
11	蛇塚B遺跡Ⅲ	佐久市大字新子田1906 2,176m <sup>2</sup>	住8(平安) 佐久市埋蔵文化財調査報告書第36集『蛇塚B遺跡Ⅲ』
12	八風山遺跡群	佐久市大字香板字雨原他 11,000m <sup>2</sup>	石器製作跡(旧石器・绳文), 隕穴

### 3) 整理調查

NO	遺跡名	所 在 地 事 業 名	備 考
1	寄山・勝負沢・中条峰遺跡	佐久市大字志賀字寄山・勝負沢、瀬戸戸字中条峯 佐久リサーチパーク造成事業	平成3・4年度発掘調査 佐久市埋蔵文化財調査報告書第42集 「中条峰遺跡・寄山遺跡群」
2	西一本柳遺跡Ⅱ 中西/久保遺跡Ⅰ	佐久市大字岩田字西一本柳・中西久保 下水道工事	平成4年度発掘調査 佐久市埋蔵文化財調査報告書第37集 「西一本柳遺跡Ⅱ・中西/久保遺跡Ⅰ」
3	根々井芝宮遺跡	佐久市大字根々井238号 宅地造成	平成4年度発掘調査 住56(強中へ平)、掘立2、土坑11、溝4
4	南下中原遺跡Ⅱ	佐久市大字長土呂字南下中原 出光興産佐々イントーSS新築工事	平成5年発掘調査 佐久市埋蔵文化財調査報告書第38集「南下中原遺跡Ⅱ」
5	上久保田向・曾根新城・西曾根遺跡	佐久市大字岩田字曾根新城・西曾根・上久保田向 区画整理事業	平成元年~6 年度発掘調査 佐久市埋蔵文化財調査報告書第41集「曾根新築遺跡」・Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ、上久保田向遺跡】・Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ、西曾根遺跡Ⅱ・Ⅲ

#### 4) 試掘・立会調査

試掘調査 37件 立会調査 7件

### 3 普及・公開事業

#### (1) 第15回少年考古学教室

開催遺跡 長土呂遺跡群聖原遺跡Ⅷ（佐久市大字長土呂）  
開催期日 平成6年8月3・4・5日  
対象 市内小中学校生徒  
内容 講話「佐久地方における発掘調査の成果」  
実技 奈良・平安時代を中心とする竪穴住居址の発掘  
見学 出土遺物・竪穴住居址等

#### (2) 公開現地説明会

開催遺跡 横名平・坪の内遺跡  
開催期日 平成6年4月10日  
参加者 菅沢・平井地区住民30名

#### (3) 公開展示会

志賀下宿公民館文化祭に遺物・調査パネルを出展 平成6年11月19日  
沓沢区公民館文化祭に横名平遺跡調査パネルを出展 平成7年1月28・29日

### 4 分析・鑑定

#### (1) 八風山遺跡群・八風山Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ遺跡

火山灰分析・放射性炭素年代測定・植物珪酸体分析 株式会社古環境研究所

#### (2) 中条峯遺跡・寄山遺跡群

黒曜石・安山岩製遺物の石材産地分析 京都大学原子炉研究所

土器胎土分析 (株)第四紀 地質研究所

### 5 刊行図書

#### 佐久市埋蔵文化財調査報告書

- 第35集 『市内遺跡発掘調査報告書1993』
- 第36集 『蛇塚Ⅲ遺跡Ⅲ』
- 第37集 『西一本柳遺跡Ⅱ・中西ノ久保遺跡Ⅰ』
- 第38集 『南下中原遺跡Ⅱ』
- 第39集 『中屋敷遺跡』
- 第40集 『寺畠遺跡』
- 第41集 『曾根新城遺跡Ⅰ他・上久保田向遺跡Ⅰ他・西曾根遺跡Ⅱ・Ⅲ』
- 第42集 『中条峯遺跡・寄山遺跡群』

### III 調査概要

## 凡　例

1. 本章では、平成6年度の発掘調査の概要を収録した。
2. 遺跡の位置図は、佐久市発行の50,000分の1地形図を使用した。
3. 遺跡の概要是、各担当者が執筆した。

## 寺畠遺跡群寺畠遺跡

所在地 佐久市大字猿久保字下原591他  
調査委託者 佐久市（都市計画課）  
開発事業 地方道路整備臨時交付金街路事業  
調査期間 平成6年8月26日～9月7日  
調査面積 1,500m<sup>2</sup>  
調査担当者 上原 学



### 経過と立地

寺畠遺跡は佐久市大字猿久保地籍に所在し、遺跡の北を西方向に蛇行しながら流れる湯川の左岸段丘面北端に位置する。標高は688m付近を測る。

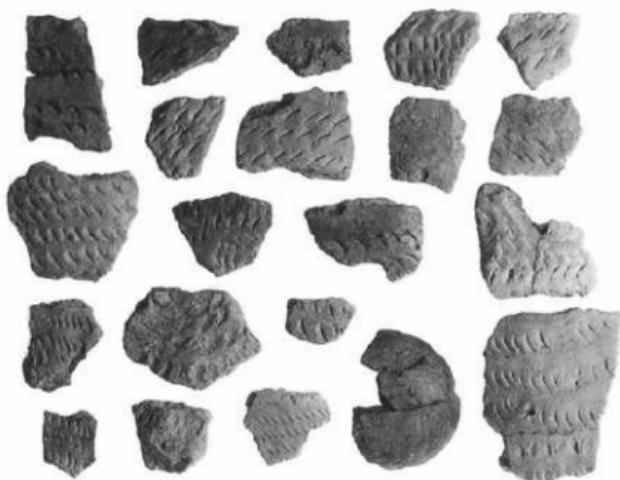
今回、佐久市都市開発部都市計画課による地方道路整備臨時交付金街路事業とし、都市計画道路332号小諸佐久臼田線道路整備が行われることとなり、平成6年5月6日・7日にかけて試掘調査を行った。その結果、遺構・遺物の存在が確認されたため、佐久市教育委員会が主体となり、発掘調査を実施する運びとなった。

### 調査概要

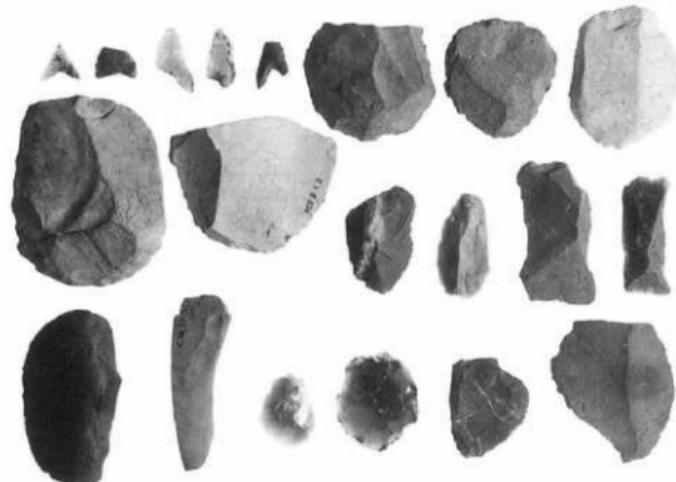
今回の調査では、弥生時代住居跡1、平安時代住居跡1、性格不明ピット多数を確認した。遺物は、縄文土器・弥生式土器・土師器・須恵器・石器が出土した。この中には縄文草創期に位置付けられる爪形文土器が含まれている。土器はすべて破片だが、口縁部・体部・底部が認められ、土器の全体像をうかがい知ることができる。出土数は21片を数える。またこれに伴うと考えられる石器も出土している。



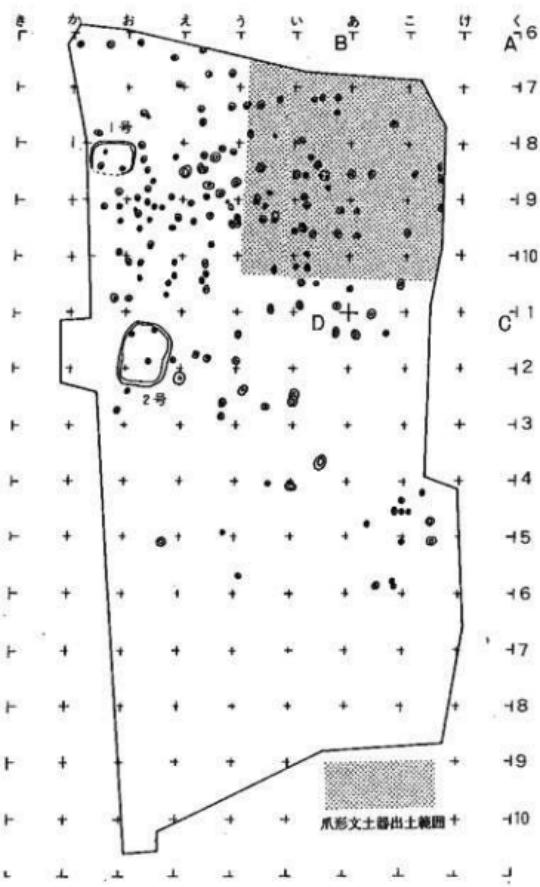
寺畠遺跡全景



寺煊遺跡出土爪形文土器



寺煊遺跡出土石器



寺畠遺跡全体図（1：400）

## 上芝宮遺跡Ⅲ

所在地 佐久市大字長土呂  
調査委託者 佐久市（新幹線高速道課）  
開発事業 市道改良  
調査期間 平成6年10月12日～12月14日  
調査面積 630m<sup>2</sup>  
調査担当者 林 幸彦

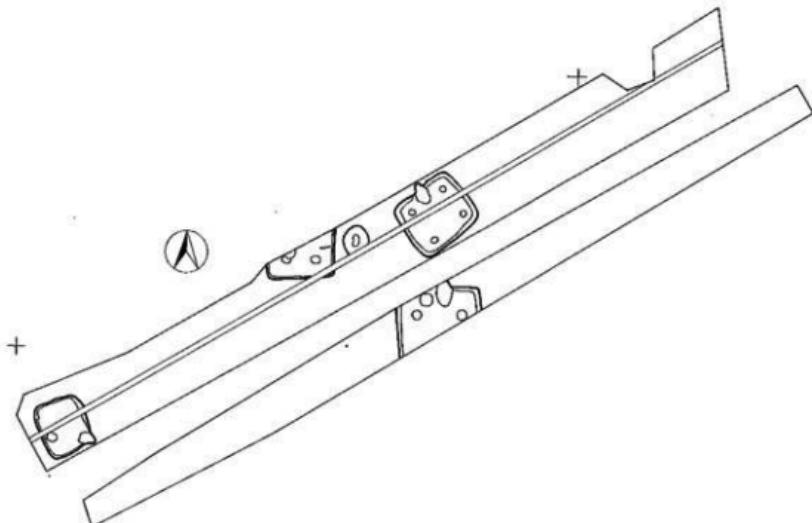


### 経過と立地

佐久市北端の小諸市との市境付近は、田切り地形の発達した地域であり、この田切りに挟まれた台地上には多くの遺跡群が存在する。今回、佐久市が市道を改良するにあたり、記録保存のための発掘調査を実施した。

### 調査概要

古墳時代～平安時代の竪穴住居址4軒等が拡幅部分はもとより現道の下からも検出された。



上芝宮遺跡Ⅲ全体図 (1 : 400)



H4号住居址



H4号住居カマド址

## 下曾根遺跡Ⅱ

所 在 地 佐久市大字小田井

調査委託者 佐久市（新幹線高速道課）

開 発 事 業 市道改良

調 査 期 間 平成6年11月28日～12月22日

調 査 面 積 866m<sup>2</sup>

調査担当者 林 幸彦

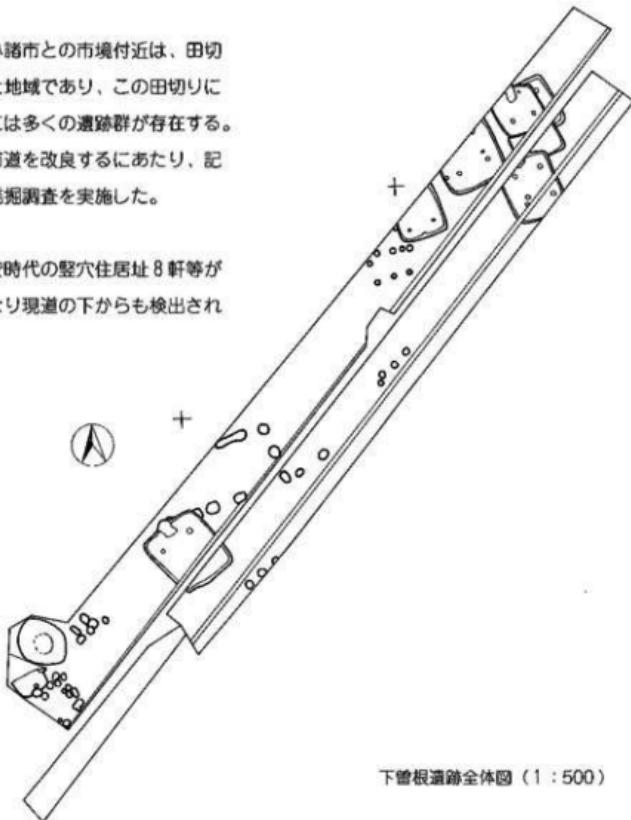


### 経過と立地

佐久市北端の小諸市との市境付近は、田切り地形の発達した地域であり、この田切りに挟まれた台地上には多くの遺跡群が存在する。今回、佐久市が市道を改良するにあたり、記録保存のための発掘調査を実施した。

### 調査概要

古墳時代～平安時代の整穴住居址8軒等が拡幅部分はもとより現道の下からも検出された。



下曾根遺跡全体図 (1 : 500)



下曾根遺跡遠景



下曾根遺跡近景

## 枇杷坂遺跡群上久保田向遺跡VII

所 在 地 佐久市大字岩村田字上久保田向  
212-5, 207-1

調査委託者 佐久市（区画整理課）  
開 発 事 業 佐久都市計画事業岩村田北部第一土地区画整理事業に伴う道路建設工事

調査期間 平成6年5月11日～5月21日

調査面積 458m<sup>2</sup>

調査担当者 森泉 かよ子



### 経過と立地

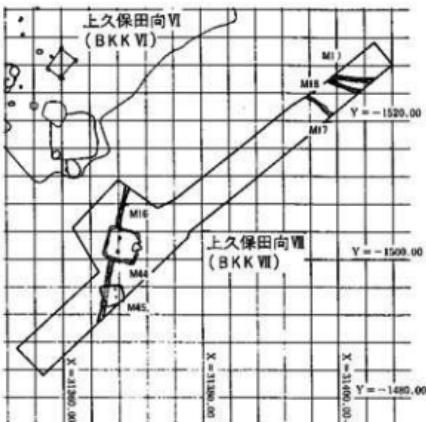
上久保田向遺跡は、浅岡山南麓末端部の田切り地形が発達した地域に所在し、台地上に集落が分布している。上久保田向遺跡は平成2年の佐久市都市計画岩村田北部第一土地区画整理事業の道路建設に伴う発掘調査を初めとして、すでに6カ所で調査が行われ、竪穴住居址、掘立柱建物址、土坑が検出されている。今回も道路建設地に遺構が検出され、調査する事になった。

### 調査概要

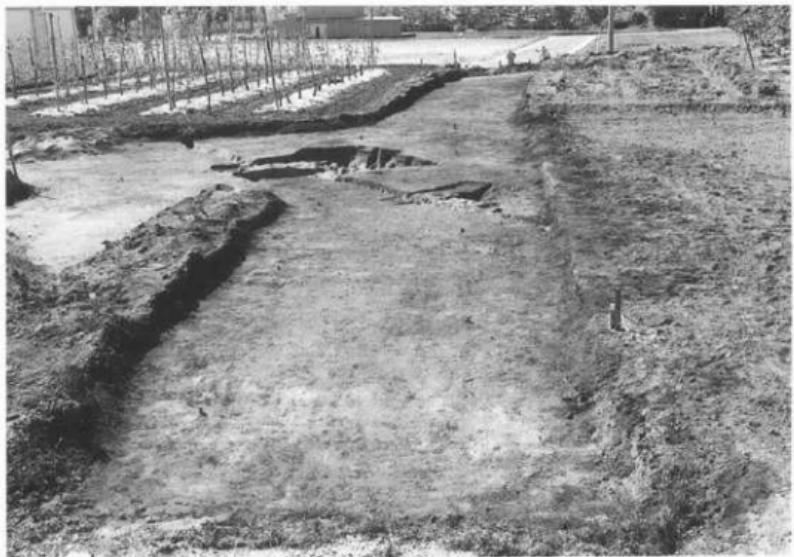
竪穴住居址2棟、溝状遺構4本を検出した。竪穴住居址は2棟とも平安時代であるが、H44号は中頃、H45号は末頃の住居址である。

溝状遺構のM16号は平安時代の住居址に切られ、中頃より前の遺構である。他の3本の年代はつかめなかった。

上久保田向遺跡III地区が北東にあるが、同様の時代の遺構がこの地点まで継続していることが確認された。



上久保田向遺跡VII地区全体図 (1:800)



上久保田向遺跡Ⅱ地区（東より）



H44号住居址（南より）

## 長土呂遺跡群聖原遺跡

所 在 地	佐久市大字長土呂
調査委託者	佐久市土地開発公社
開 発 事 業	佐久流通業務団地造成
調 査 期 間	平成6年4月5日～11月28日
調 査 面 積	13,000m <sup>2</sup>
調査担当者	三石 宗一 上原 学 森泉 かよ子



### 経過と立地

長土呂遺跡群は佐久市の北部、浅間山南麓の末端部に位置する。この地域は南西方向に放射状にのびる田切り地形が非常に発達しており、この田切りに挟まれた台地上には東から栗毛坂遺跡群・枇杷坂遺跡群・長土呂遺跡群・芝宮遺跡群・周防畠遺跡群・近津遺跡群など有数な遺跡群が展開している。聖原遺跡は長土呂遺跡群のほぼ中央部に位置し、標高735～744mを測り、南西に向かって緩やかに傾斜する。この付近は、昭和61年度から長野県埋蔵文化財センターによって行われた上信越自動車道関係の発掘調査をはじめとして、国道141号バイパスなどの道路整備事業、区画整理事業、その他民間開発等に伴う大規模な発掘調査が継続して行われている地域である。

佐久流通業務団地造成に伴う聖原遺跡の発掘調査は、平成元年度から平成5年度までの5カ年で約76,300m<sup>2</sup>の調査が行われ、聖原遺跡Ⅶはこの継続事業として実施された。

### 調査概要

平成6年度に調査を実施した聖原遺跡Ⅶは、平成元年度から調査を行った聖原遺跡Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵの継続事業であり、調査面積は13,000m<sup>2</sup>である。6年間の総調査面積は約90,000m<sup>2</sup>に及ぶ。聖原遺跡Ⅶは、平成5年度に調査された聖原遺跡Ⅵ（10A地区）の東側及び北側に隣接し、佐久流通業務団地造成に係る聖原遺跡の東端部に位置する。

聖原遺跡Ⅶで検出された遺構は、竪穴住居址87棟、掘立柱建物址67棟、土坑99基、粘土坑4基、その他溝状遺構、ピット群等である。昭和63年度の上聖端遺跡、聖原遺跡Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵで検出された遺構の総数は竪穴住居址約930棟、掘立柱建物址約780棟にのぼる。



聖原遺跡11A地区航空写真



聖原遺跡12A地区航空写真

## 標名平遺跡

所在 地 佐久市大字根岸字標名平  
調査委託者 長野県土地開発公社  
開発事業 厚生年金福祉施設建設に伴う造成  
調査期間 平成6年4月3日～7月15日  
調査面積 2,460m<sup>2</sup>  
調査担当者 羽毛田 卓也 富沢 一明  
佐々木 宗昭



### 経過と立地

標名平遺跡は佐久市の西部に位置する。遺跡の地形は蓼科山麓から派生する一山麓の末端にあり、千曲川によって形成された沖積低地を見下ろす南東に傾斜した台地上にある。標高は680m内外を測る。

周辺の遺跡としては、西約400mの尾根上に滝の峯古墳が、また北西約1kmには石附窯址群が存在する。本遺跡は平成5年度から大規模な発掘調査が行われており、今まで伝承のなかった中世後期の所産と考えられる溝を巡らす籠跡が検出されている。また縄文時代前期～平安時代に及ぶ堅穴住居址100軒以上や中世後期と考えられる土塙墓・火葬墓も確認されている。

今年度は、平成5年度の継続部分である中世館跡と中世墳墓群及び外周道路部分について発掘調査をおこなった。



標名平遺跡遠景（東南より）

## 調査概要

中世館跡では引き続き竪穴状遺構及び柱穴が検出された。特に井戸址あるいは水溜め土壙から  
は井戸枠の構築材と考えられる木製品が出土した。外周道路部分からは遺跡西端の埋没谷より  
縄文時代後期の土器片が確認された。中世墳墓群が検出された台地では、引き続き土壙墓・尖葬墓  
・石を詰めた土壙墓が発見され当遺跡の中世墳墓は合計59基を数える。

また、中世墳墓群に接して古墳址が発見された。盛土は確認できなかったが、横穴式石室の左  
半分が残存しており、石室内より鐵鎌や土師器壺に納められた骨などが出土した。



弥生時代後期住居址



土壙墓



尖葬墓



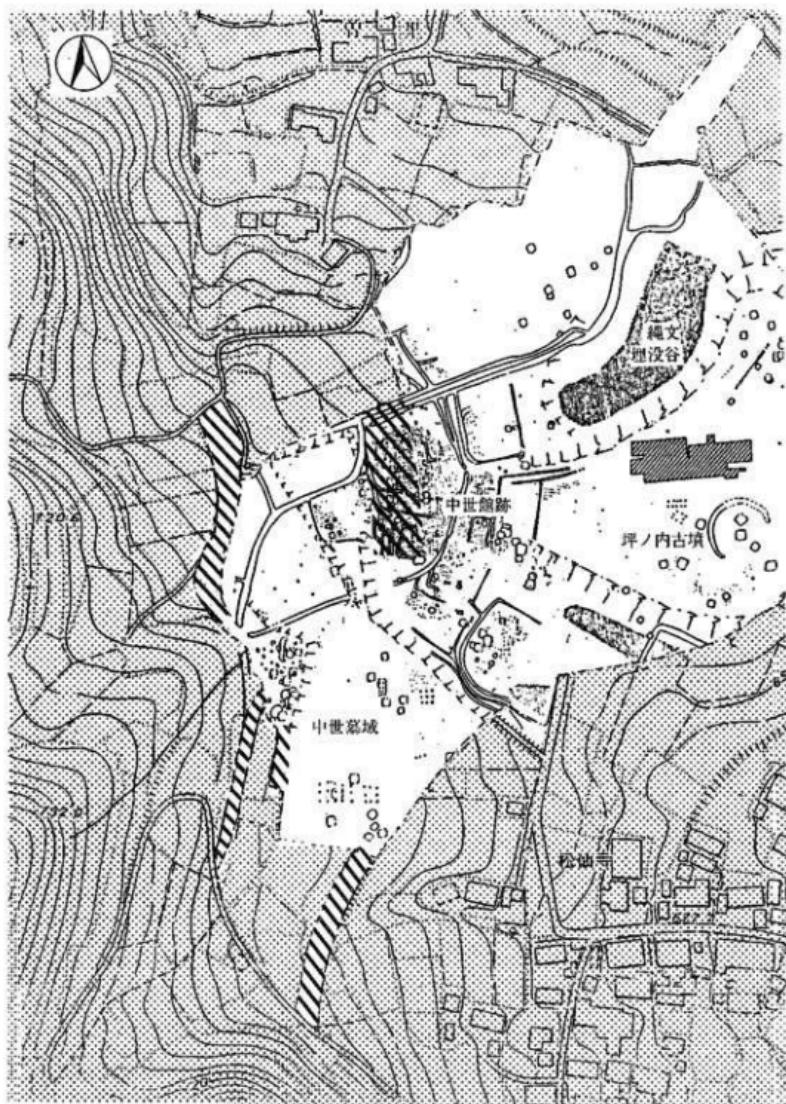
石を詰めた土壙墓



検出時の古墳全景



横穴式石室



棟名平遺跡調査全体図

平成6年調査

## 寺添遺跡

所 在 地 佐久市大字三塚73-9  
調査委託者 長野県土地開発公社  
開 発 事 業 職員宿舎建設  
調 査 期 間 平成6年7月18日～11月2日  
調 査 面 積 2,128m<sup>2</sup>  
調査担当者 富沢 一明 佐々木 宗昭



### 経過と立地

寺添遺跡は三千束遺跡群ないに所在し、千曲川と片貝川に挟まれた標高約670m前後を測る沖積微高地に位置する。当遺跡周辺は大規模な圃場整備が終了し水田となっている。

周辺の遺跡としては、市道遺跡、跡部町田遺跡、三塚遺跡などが調査されている。各遺跡からは、古墳時代中期・後期の住居址がいずれも確認されており、付近は大規模な集落遺跡の可能性を色濃く示している地域である。

今回、寺添遺跡内において佐久地区職員宿舎建設の計画があり、長野県土地開発公社より佐久市教育委員会に当地籍においての遺跡有無の照会があった。教育委員会では試掘調査を行いその結果をもとに保護協議を行った。しかし、現状での設計変更は難しく記録保存の発掘調査を行うこととなった。

### 調査概要

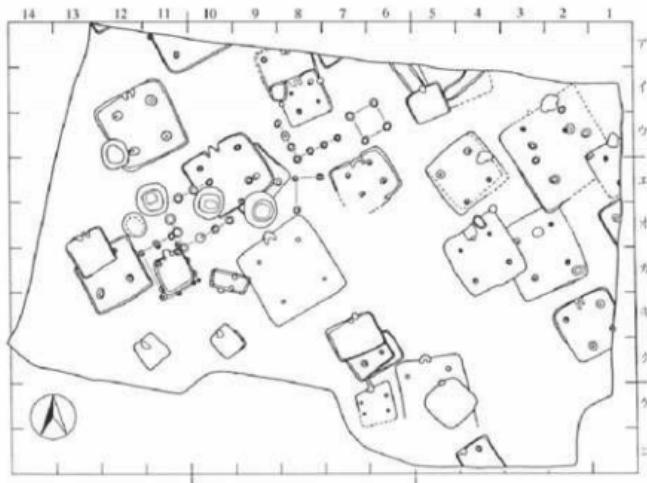
発掘調査の結果、遺構は調査区全体に広がっており、重複も激しい部分があった。また、調査区が沖積地低地である為、遺構確認・掘下げ時に湧水層に当たってしまい困難な調査となった。

検出された遺構は竪穴住居址29軒、掘立柱建物址6棟、井戸址4基、溝状遺構1本、土壙3基であり、出土遺物は土師器、須恵器、青磁片、木製品、滑石製臼玉などがある。

検出された竪穴住居址はほとんどが主軸方位を北西にとり、カマドは北壁に設置されていた。また、住居址カマド内や床面からはまとまった形で臼玉等の出土が見られた。住居址の所産時期は、出土遺物より古墳時代中期が4軒、古墳時代後期が19軒、奈良時代3軒、時代不明3軒であった。掘立柱建物址は出土遺物がなく所産時期が不明なものが多いが、遺構の新旧関係より同時期の建物址は少ないと考えられた。井戸址からは、炭化種子・青磁片・井戸枠材と考えられる木製品が出土した。



寺添遺跡航空写真



寺添遺跡調査全体図

## 中屋敷遺跡

所 在 地	佐久市大字平賀字北耕地5365-2
調査委託者	佐久建設事務所
開 発 事 業	交通安全事業に伴う歩道設置建設
調 査 期 間	平成6年9月12日～9月22日
調査面積調	139.5m <sup>2</sup>
査 担 当 者	富沢一明



### 経過と立地

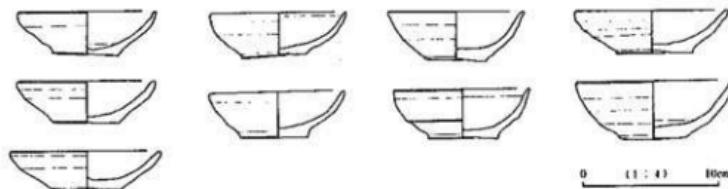
本遺跡は、滑津川左岸の段丘上にあり弥生時代中期～平安時代の複合遺跡である。調査地点標高687mを測り北側に緩く傾斜する地形である。

遺跡周辺には、古墳時代後期の大集落約300軒が調査された桶村遺跡がある。

今回、佐久建設事務所が実施する県道香坂中込線の交通安全事業に伴い、幅2mの歩道を建設することとなり、発掘調査を行うこととなった。

### 調査概要

当遺跡は遺構確認面がこぶし大の河原石を含む堆積層で、遺構検出には困難を極めたが、検出された遺構は、竪穴住居址4軒・土壙3基である。細長い調査区の為に竪穴住居址は全容を把握できるものはなかった。出土遺物は土師器羽釜・壺、須恵器壺、灰釉陶器皿、刀子などがあり豊富であった。遺構の所産時期は出土遺物より10世紀後半～11世紀前葉と考えられる。



中屋敷遺跡出土遺物



中屋敷遺跡調査区遠景（北より）



遺跡出土の灰釉陶器



遺跡出土遺物



中屋敷遺跡全体図

## 棚畠遺跡

所 在 地 佐久市大字上平尾字棚畠  
調査委託者 佐久市平尾山開発株式会社  
開 発 事 業 スキー場造成工事  
調 査 期 間 平成6年4月6日～5月22日  
調 査 面 積 3,700m<sup>2</sup>  
調査担当者 上原 學



### 経過と立地

棚畠遺跡は、佐久市平尾山の北斜面、舌状に張り出した台地の先端部及び北方を西方向に流れる湯川の左岸段丘面上に位置する。

遺跡は平成5年から調査を開始しており、縄文時代～平安時代に至る住居跡・土坑など多くの遺構・遺物が確認されている。本年度は平成5年度の継続調査で、残り3,700m<sup>2</sup>の調査を行った。

### 調査概要

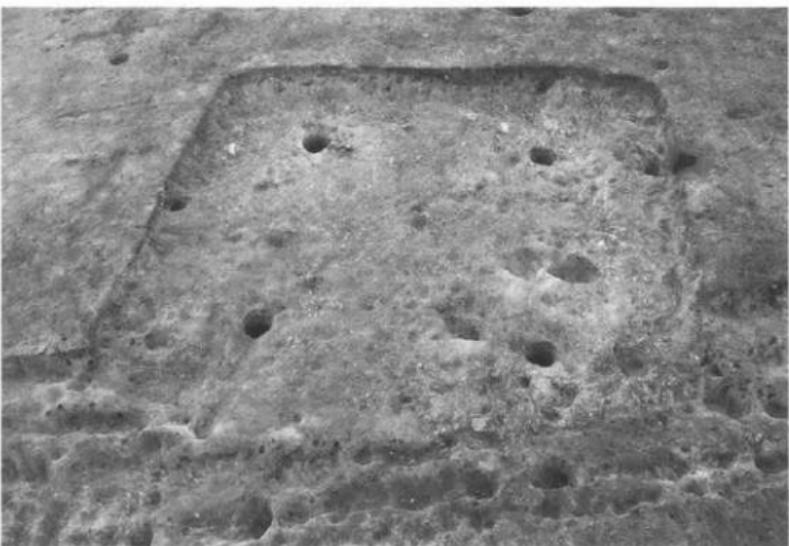
今回の調査によって、縄文時代の住居跡1、土坑6、平安時代の住居跡4、中世の縦穴状遺構1、掘立柱建物跡1を確認した。



棚畠遺跡V地区全景



粗砾遺跡V地区 1号住居跡



粗砾遺跡V地区 積穴状遺構

## 権現平遺跡・池端城跡

所 在 地 佐久市大字新子田字権現平他  
調査委託者 セキスイハイム信州株式会社  
開 発 事 業 住宅造成  
調 査 期 間 平成6年10月3日～12月5日  
調 査 面 積 6,500m<sup>2</sup>  
調査担当者 富沢 一明 上原 学



### 経過と立地

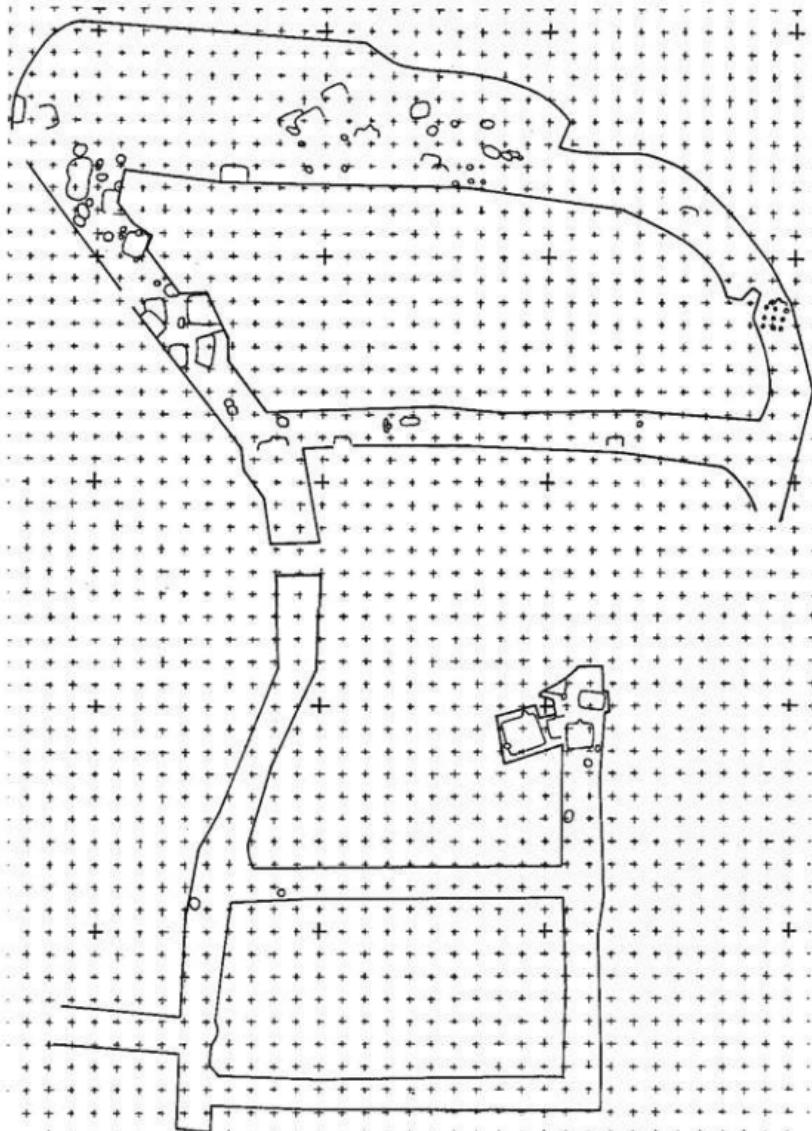
遺跡は佐久市大字安原と新子田の境付近に所在する。遺跡の周囲は北・南・東の三方を山に囲まれ、西側は小河川をはさみ平坦な地形が広がる。標高は696～710mを測る。

今回、セキスイハイム信州株式会社による宅地造成が行われることとなり、試掘調査を行った。その結果、縄文時代から中世に至る多くの遺構・遺物が認められた。このためセキスイハイム信州株式会社から委託を受けた佐久市教育委員会が主体となり発掘調査を行う運びとなった。

### 調査概要

今回の調査は、遺構の破壊が予想される削平部分及び道路部分の断片的なものであったが、縄文時代から中世にいたる多くの遺構・遺物を確認した。調査した遺構は以下のとおりである。

縄文時代	住居跡	8棟	土坑	20基
古墳時代	住居跡	10棟	土坑	4基
平安時代	住居跡	4棟	土坑	11基
中世	竪穴状遺構	12棟		
不明	掘柱建物跡	1棟	土坑	22基
	井戸跡	2基		溝 3条



権現平遺跡・池端城跡全体図 (1 : 1,000)



12号住居跡



2号井戸跡

## 蛇塚B遺跡Ⅲ

所在地 佐久市大字新子田1906

調査委託者 寿住宅株式会社

開発事業 住宅造成

調査期間 平成6年8月17日～10月11日

調査面積 2,176m<sup>2</sup>

調査担当者 林 幸彦



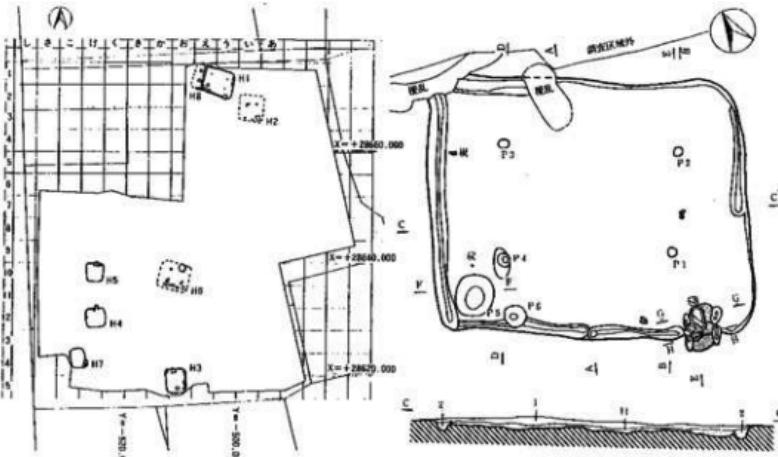
### 経過と立地

蛇塚B遺跡は、湯川右岸の標高715mを測る台地上に立地する。本遺跡は、1979年に第一次調査、1983年に第二次調査が行われ、平安時代の竪穴住居址21軒が検出されている。

今回、寿住宅株式会社が宅地造成を行うこととなり、試掘調査を実施した。その結果、竪穴住居址の存在が確認され、記録保存のための第三次発掘調査を実施することとなった。

### 調査概要

今回の調査で検出された遺構は、平安時代の竪穴住居址8軒である。竪穴住居址の時期は、出土遺物より9世紀末葉～10世紀後半と考えられる。



蛇塚B遺跡Ⅲ全体図

H 1号住居址 (1 : 100)



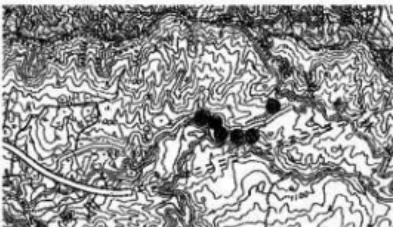
蛇原B遺跡Ⅲ航空写真



H1号住居址（南方から）

## 八風山遺跡群

所 在 地	佐久市大字香坂字雨原他
調査委託者	交栄興産株式会社
開発事業	佐久高原レクリエーション施設造成
調査期間	平成6年4月4日～12月22日
調査面積	11,000m <sup>2</sup>
調査担当者	須藤 隆司 羽毛田 卓也



### 経過と立地

八風山遺跡群は、黒色安山岩原産地である八風山の西麓緩斜面に位置している。遺跡は、山麓線辺を西流する香坂川にそそぐ、幾つかの沢によって開析された尾根状平坦面・小段丘状平坦面に立地する。現在、旧石器時代の石刃製作遺跡1ヶ所、縄文時代草創期の石槍製作遺跡2ヶ所、縄文時代早・前期の石器製作・狩猟(陥穴群)遺跡6ヶ所が確認されている。

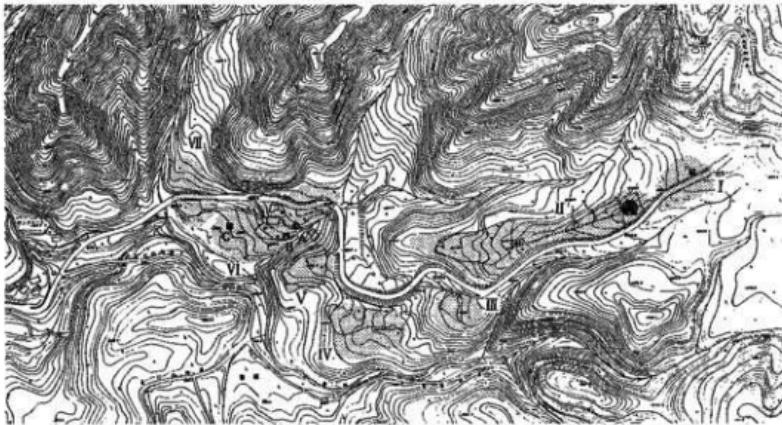
交栄興産株式会社によるオートキャンプ場造成に伴う八風山遺跡群の本調査は平成5年から開始され、本年度の調査もその継続調査である。

### 調査概要

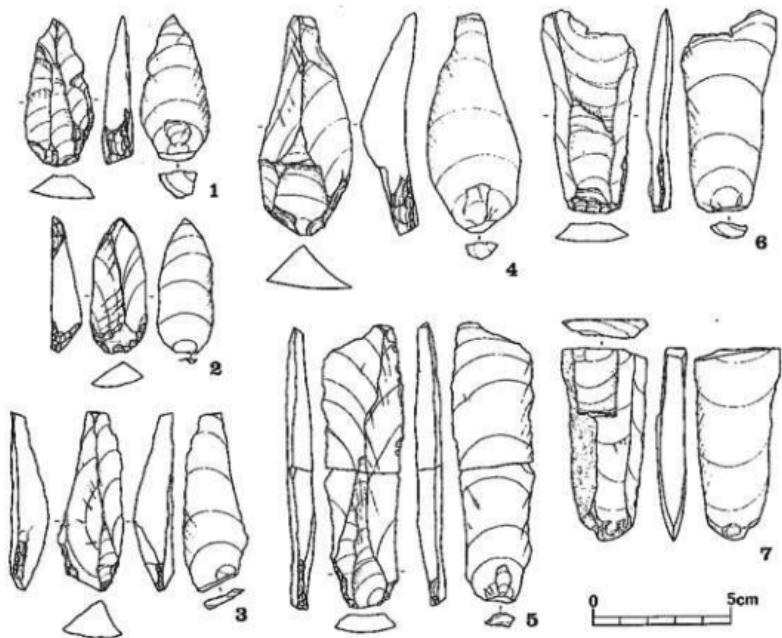
本年度の調査遺跡は、八風山II～VII遺跡である。八風山II遺跡では、始良Tn火山灰(AT)・八ヶ岳新期第IV軽石(Ypm-IV)降灰以前の褐色粘質土層から、約600点の石器群が検出された。それは、<sup>14</sup>C年代32,000年を測る後期旧石器時代初頭のナイフ形石器・石刃石器群である。

八風山III・IV・V・VI・VII遺跡では、縄文時代早期・前期の石器製作跡と早期と考えられる陥穴群が検出された。特にV遺跡では、集中的な石器製作跡が5ヶ所以上存在し、それは台地上に限られず、現在の沢とほとんど比高差のない低地部においても存在していた。

八風山VI遺跡では、浅間板巖黄色軽石(As-YP)上部のローム層から、2地点において石槍石器群が検出された。A地点では、5点ほどの石槍半完成品・欠損品を含む約2,500点の石器群が確認された。B地点では、径3mほどの規模を有する石槍製作跡が遺存していた。それは、積み重なった状態で石器群が出土した4ヶ所のスポットで構成され、その中央に炭化物集中部が存在していた。石槍半完成品・欠損品約30点、石槍調整剥片約40,000点が検出されている。<sup>14</sup>C年代は12,000年である。



八風山遺跡群



八風山II遺跡 ナイフ形石器（1～6）・刃部磨製石刃（7）



八風山Ⅱ遺跡 石刃石器群ブロック



八風山Ⅱ遺跡 ナイフ形石器

IV 清水田遺跡調査報告



清水田遺跡調査区位置図

## 凡　例

1. 本章では昭和54年度に発掘調査を行った清水田遺跡の調査報告を収録した。
2. 遺跡の位置図は、佐久市発行の50,000分の1地形図を使用した。
3. 執筆は林　幸彦が行った。

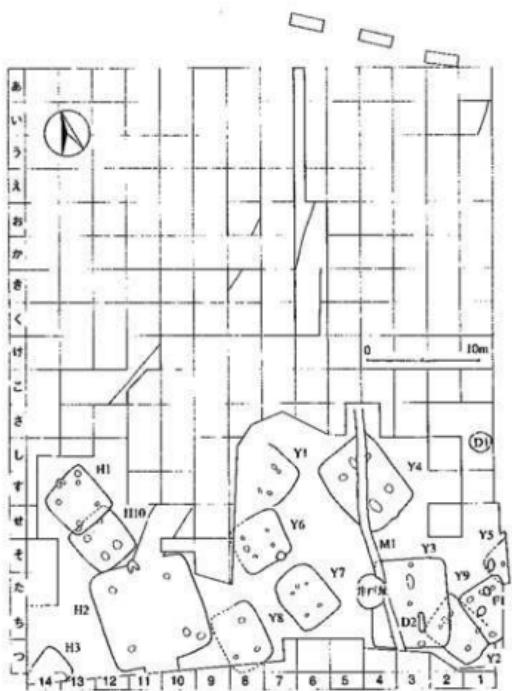
**所 在 地** 佐久市大字岩村田字清水田  
1371,1372,1375,1376-1,  
1376-7-8

**調査委託者** 東信土地改良事務所  
**調査期間** 昭和54年2月22日～3月24日  
**調査面積** 約780m<sup>2</sup>  
**調査担当者** 藤沢 平治 林 幸彦

#### 経過と立地

昭和53年度長野県営圃場整備事業が東信土地改良事務所を主体に着手され、重機により水田耕土削平が開始された折り、長野県遺跡パトロール員2氏が多量の土器と炭化材を発見した。佐久市教育委員会は長野県文化課の指導を受けながら、東信土地改良事務所に工事の一時中止を申し入れた。昭和54年1月9日に長野県文化課、東信土地改良事務所、佐久市教育委員会の3者協議を行い昭和54年2月22日より緊急に記録保存することになった。

清水田遺跡は円正坊遺跡群の西端にあり、標高は703～704mを測る。今回の調査まで包蔵地として周知されていなかった。浅岡山からの緩斜面は、この一帯でほぼ平坦面となり各所に澆水がみられ、水引や清水田等の小字名がみら



清水田遺跡遺構全体図

れる。付近には、昭和5年に神津猛氏等により竪穴住居址3棟が調査された岩村田駅遺跡がある。また、江戸中期に吉沢鶏山が著した「四隅譜載」に、円勝寺の廃址として円勝寺または円正坊と呼ばれる地があり、この付近一帯より壺等が出土すると記されているように古くから知られ調査されている。

#### 調査概要

仙禄湖から北佐久農業高校にかけて田切り地形がみられるが溝水田遺跡に至ると消失する。遺跡の土層は黒褐色の層厚40cmの水田耕土、明褐色の浅間第一輕石流に大別された。対象地の小海線よりは開田時に1m程削平されており、遺構は確認されず、対象地の南半分から検出された。

弥生時代中期1軒・後期9軒、古墳時代後期3軒の竪穴住居址、掘立柱建物址1棟、井戸址1基、土坑2基、溝2条が検出された。

#### Y1号住居址

本住居址は、畠境から検出され、すでに耕作により北側及び西側の大半を破壊されていた。平面形態は、隅丸方形な

いしは長方形を呈する

と思われる。東西壁長

推定5.0m、壁残高は南

東角で20.5cmを測る。

南北軸方向はN32°Wを

指す。P1・P2が柱

穴。2個一対のP5・

P8が入口に関連する

と考えられる。P1は

37.5cm、P2は64.5cm

と深い。覆土2・3層

からは多量の炭化材が

みられ焼失住居の可

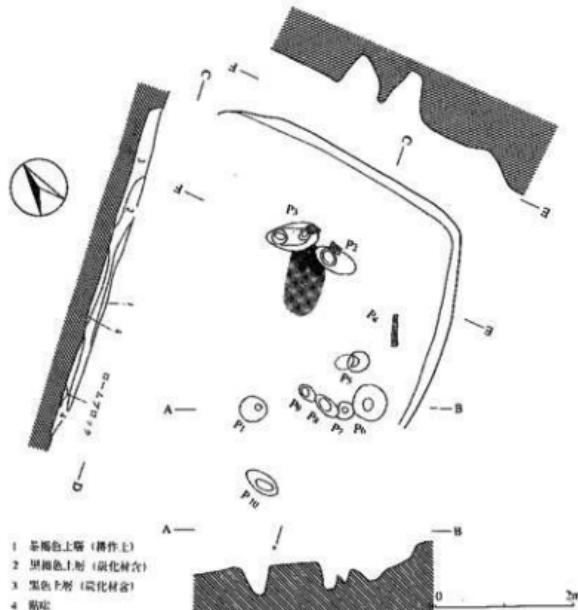
能性が高い。1・2・5

の壺は南西隅、3の

壺・6の壺・13の磨製

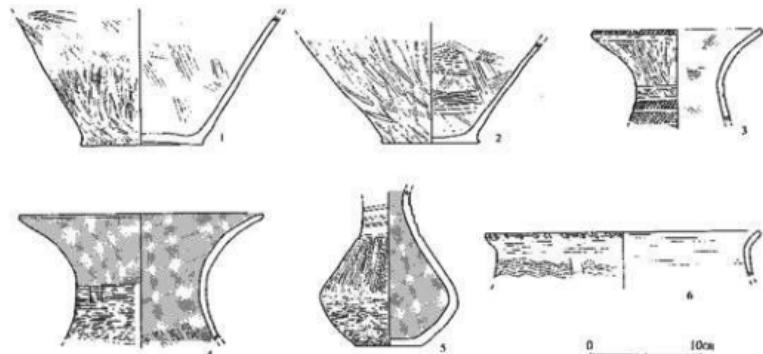
石斧転用敲き石は東の

床面上から出土した。

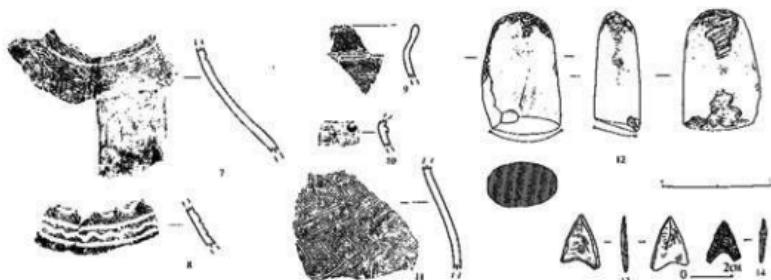


Y1号住居址

炉は削平されていた。以上の出土遺物から本住居址は、弥生時代中期後半に位置づけられる。



Y-1号住居址出土遺物実測図その1

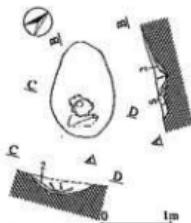


Y-1号住居址出土遺物実測図その2

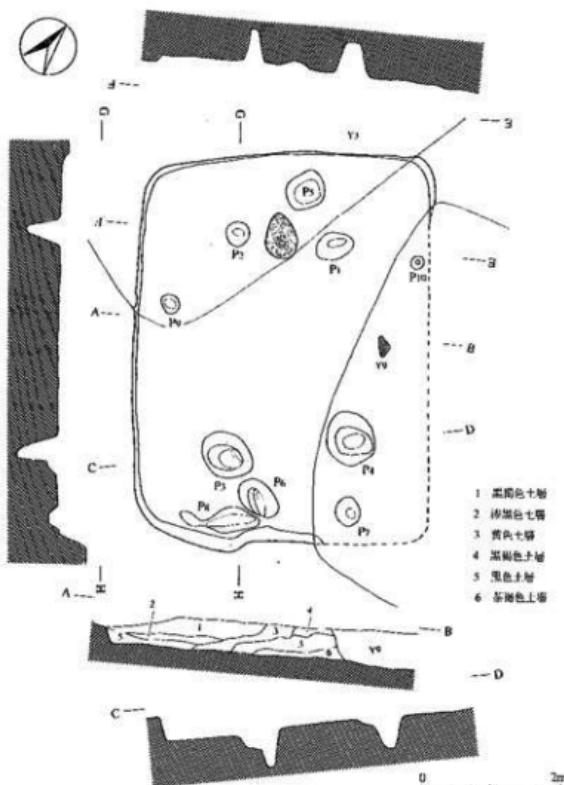
## Y-2号住居址

本住居址は、Y-3号住居址とY-9号住居址に破壊されている。平面形態は北壁4.2m・西壁5.3mの隅丸長方形を呈し、壁残高は南壁で46cmを測る。長軸方向はN40°Wを指す。床面は全体に堅固で、北側の主柱穴間に炉が設置されている。炉は70×45cmの楕円形、深さ10cmで16の壺底部を埋設する土器埋設炉である。南側には緑石(河原石)が置かれていた。壺底面から西北にかけての炉内底面には焼土の堆積があった。ピットは9個検出された。P1～P4は45～51.5cmと深く、長方形に配慮され主柱穴と考えられる。南壁中央のP6とP7は入口に関連するピットであろう。P5は深さ17cmで棟持柱であろうか。覆土の第3層は、地山の浅間第一疊石流を多量に含みY-7号住居址・Y-8号住居址にも共通してみられるものである。遺物は弥生時代後期後半(15～29・31)、弥生時代中期後半(30・32・33)の壺・壺・鉢・高环が出土した。15は中央、20・27はP7脇、20・28はP3脇の床面から出土した。壺・鉢・高环は赤色塗彩され。炉に使用された16の壺底部は

外面稜下部にも塗彩されている。甕は頸部に横櫛描羽状文、口縁部及び胴部に横櫛描羽状文が多い(28~31)。以上の出土土器から本住居址は、弥生時代後期後半に位置づけられる。



Y 2号住居址炉実測図



Y 2号住居址実測図

### Y 3号住居址

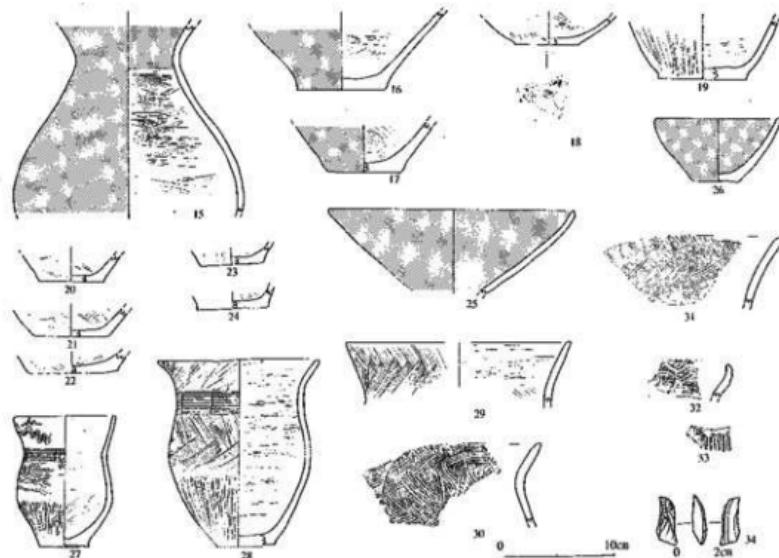
本住居址は井戸址・D 2号土坑・M 1号溝状遺構と重複し、一部を破壊している。平面形態北壁6.6m南壁6.7m、東壁7.4m西壁7.6mの隅丸方形を呈し、壁残高は10.5~31.0cmを測る。長軸方向はN 13° Eを指す。床面は全体に堅固である。ピットは9個検出されたが整然と配置された主柱穴はない。35cmを測るP2は棟持柱であろうか。深さはP1が18cm P3が9cm P4が36cm P5が25cm P6が8cmを測る。炉は北壁よりの中央と中央付近および南西隅に3個が設置されていた。主炉には炉縁石の代用ともとれるような赤色塗彩される壺頸部1/4径が埋設されていた。主炉の深さ10cm副炉1・2とも8cmであった。いずれも底面には焼土が堆積していた。出土遺物は弥生

時代後期後半の壺・甕・鉢・高坏、土製スプーン、素焼きの丸玉がある。35・36の壺は2個体とも南東隅の南壁に接するように床面から正位の状況で出土した。37の内外面赤色塗彩の高坏、40・41の壺底部、38の外面底部まで赤色塗彩された深鉢は中央から北壁にかけての床面から検出された。覆土から出土の46の土製スプーンは、先端を欠いている。47の丸玉は、直徑1.0cm孔徑0.1~0.15cmを測る。35の壺は折り返し口縁を持ち、胴部最大径が下位にあり下膨れの器形となっている。36の壺は櫛描籠状文が消滅し、櫛描波状文と横櫛描羽状文が一個体に混在して施文される。

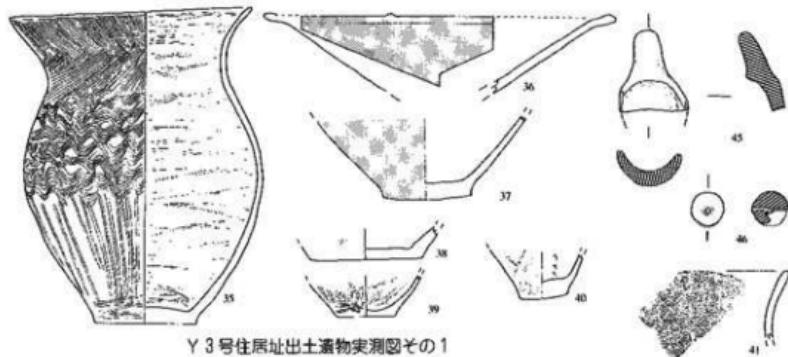
以上の出土土器から本住居址は、弥生時代後期後半に位置づけられる。

#### Y 4号住居址

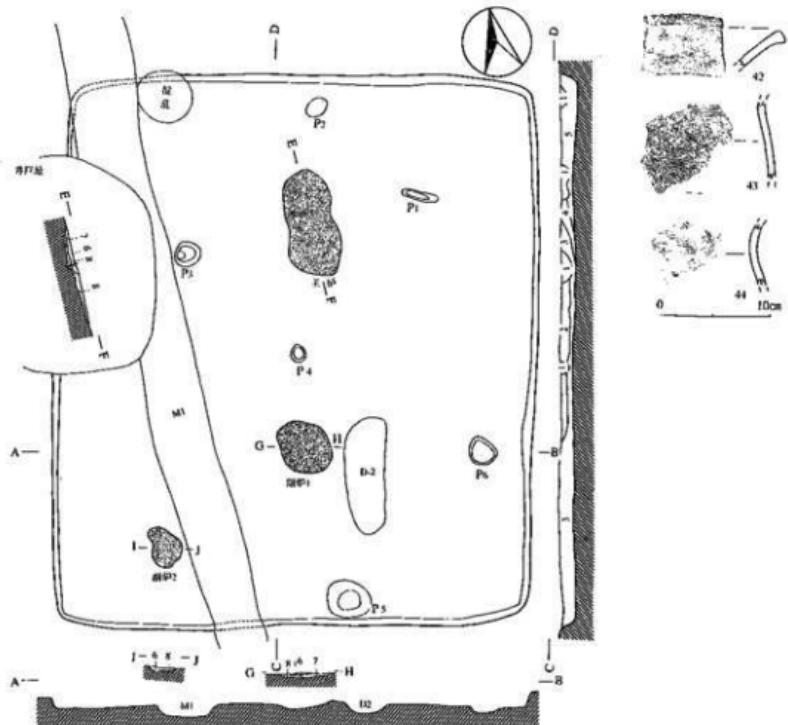
本住居址はM1号溝状遺構に一部を破壊されている。平面形態は北壁5.8m、南壁5.6m、東壁7.6m、西壁7.6mの隅丸長方形を呈し、壁残高は20.5~44.0cmを測る。長軸方向はN23°Wを指す。床面は堅固な貼床が認められた。ピットは貼床面から11個、貼床下から16個が検出された。柱の立て替えが行われたのであろう。新しい主柱穴P1~P4は深さ40~60cmで、旧主柱穴P12~P15深さ20~60cmのそれぞれ内側に穿たれている。いづれも長方形に整然と配置されている。入口施設に隣接する深さ15cmのP5および深さ40cmのP6に対応する旧P16とP17は幾分西にずれていた。P16・P17とも深さは40cmを測る。炉の北側に位置する深さ38cmのP8は、棟持柱と考えら



Y 2号住居址出土遺物実測図



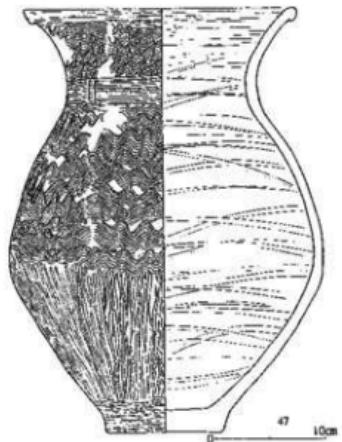
Y-3号住居址出土遺物実測図その1



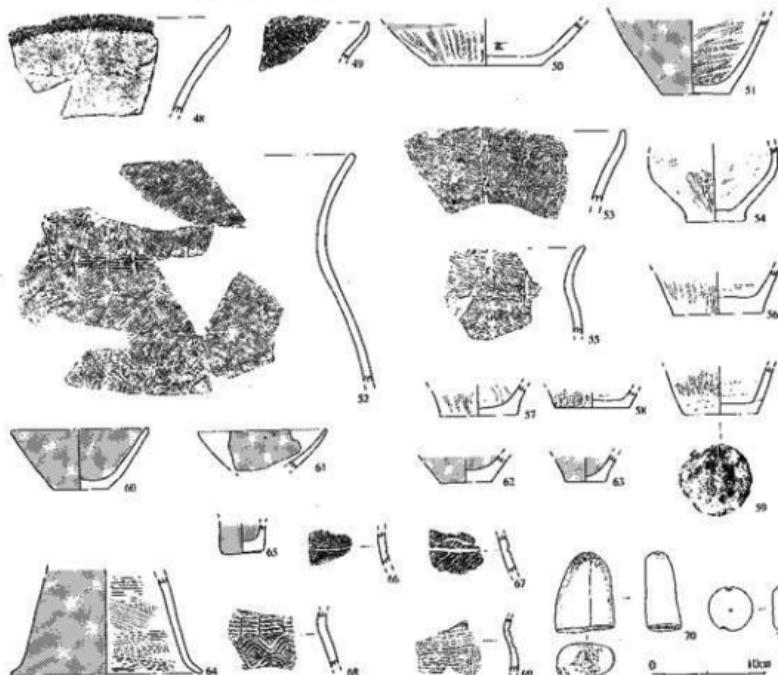
- 1 焙作上  
2 黄茶褐色土帶（粒子粗い）  
3 茶褐色土帶
- 4 黑褐色土帶（粘性あり）  
5 茶褐色土帶  
6 深黑色土帶（炭化物・礫上含む）

0 2m

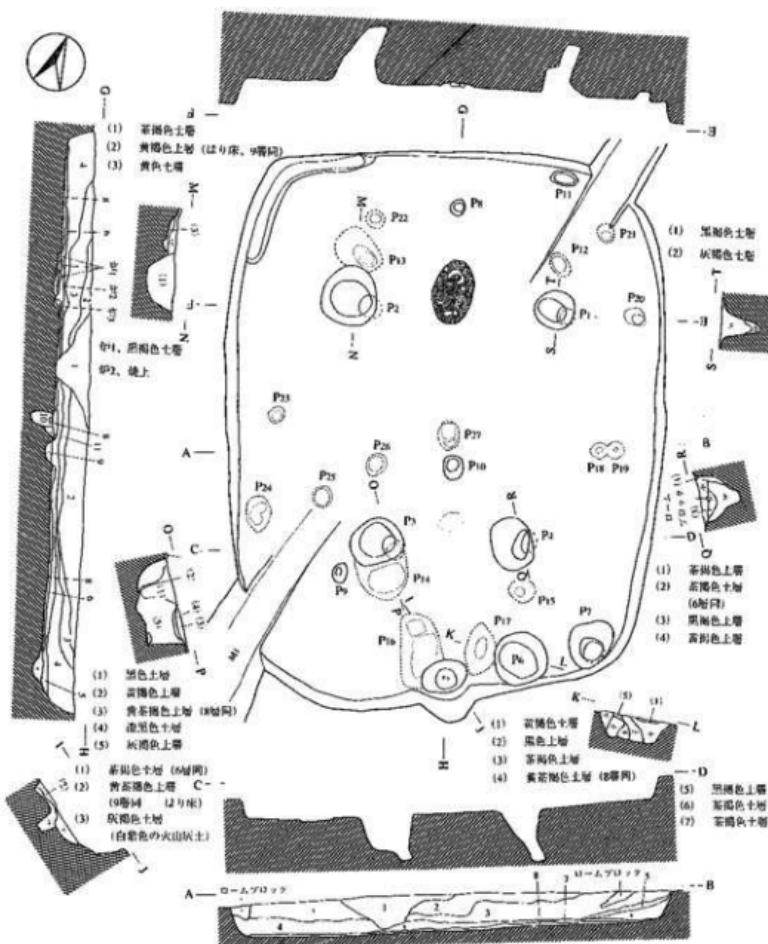
Y-3号住居址実測図



Y 3号住居址出土遺物実測図その2



Y 4号住居址出土遺物実測図



1 黒色土層 (M1分法の覆土)

2 茶褐色土層 (ローム粒子少混合、或いは)

3 黑褐色土層 (ロームブロック多、やや硬質)

4 黑褐色土層 (M1層よりやや肥厚、炭化物少混合)

5 黄褐色土層 (ローム粒子多、黑色、褐色土少混合)

6 黑褐色土層 (粒子細く、堅く緻密)

7 深褐色土層 (粒子非常に粗く、塊土含)

8 黄茶褐色土層 (はり床、ローム粒子、白紫色の

火山灰土、若褐色土の混合粒子粗く堅い)

9 黑褐色土層 (褐色土、ロームブロック混)

10 茶褐色土層

11 灰褐色土層

0 2m

#### Y4号住居址実測図

れる。P7は深さ40cm。他のピットは径30cm前後で深いもので30cm浅いもので7cmである。炉は北側の主柱穴間に設置され90×60cmの楕円形で深さ10cm、壺部のみが埋設され、南側には舞石

安山岩(角礫)の炉縁石が置かれている。この炉縁石とY7号住居址の炉縁石とが接合する。

遺物は弥生時代後期後半の土器が主体に出土した。弥生時代中期後半(67~69)も散見する。器種には壺・甕・鉢・高杯・手捏がある。他に敲石、石製品が出土した。61・63の壺、64の高杯、51の深鉢、65の手捏、70の磨製石斧を転用した敲石、相対する側縁に加工を加えて挿入部が形成されている石錘が床面から、他は覆土中より出土した。本住居址は、弥生時代後期後半に位置づけられる。

#### Y5号住居址

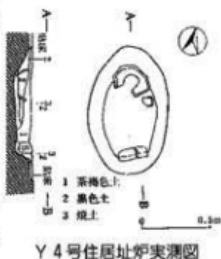
本住居址は東側の大半が対象地外にあり、北側を耕作で失い、さらに、Y9号住居址・F1号掘立柱建物址と西壁付近で重複し破壊されている。

炉の位置から北壁を推定すると4mとなる。推定長軸方向N26°W、壁残高は北壁で24.5cmを測る。ただし、Y6号住居址のように西に長軸が向く可能性もある。炉は60×45cmの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。壺口縁部(84)と壺底部(81)が埋設される土器埋設炉である。南側には炉縁石(角礫)が置かれていた。底面全面から5cm程焼土の堆積がみられた。

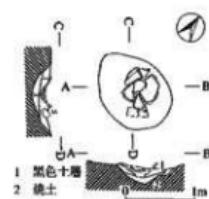
遺物は弥生時代後期後半の壺・甕・台付甕・鉢・瓶・砥石が出土している。

炉の南側床面からは73・74・84・92・94の壺、77の台付甕が集中して検出された。75の壺は北壁付近から逆位で出土した大形の破片と炉の南側から出土した細片とが接合した。95の砥石も床面からの出土である。

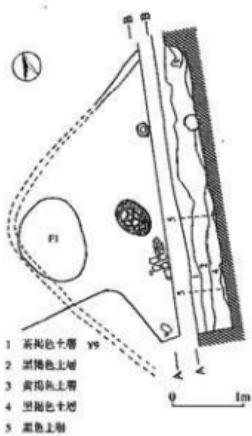
壺は無彩(75・76)と赤色塗彩される(73・74・78・84・92・94)ものがある。75の壺口縁部は短く内湾する。頸部の文様帯は、両端を籠描横線文で区切り内部を横櫛描羽状文で満たす。赤色塗彩される74の頸部にはT字文がみえる。炉に使用された壺(84)は口唇部が水平に近く開き、残存部の内外面全面に赤色塗彩がうかがえる。頸部に横櫛縦状文をその上下に横櫛波状文が施される77の小形の甕は、下部を欠くものの胴部の形状から台付甕になろう。72は円形の一孔を持ち、内外面ハケ調整の懸である。本住居址は弥生時代後半に位置づけられる。



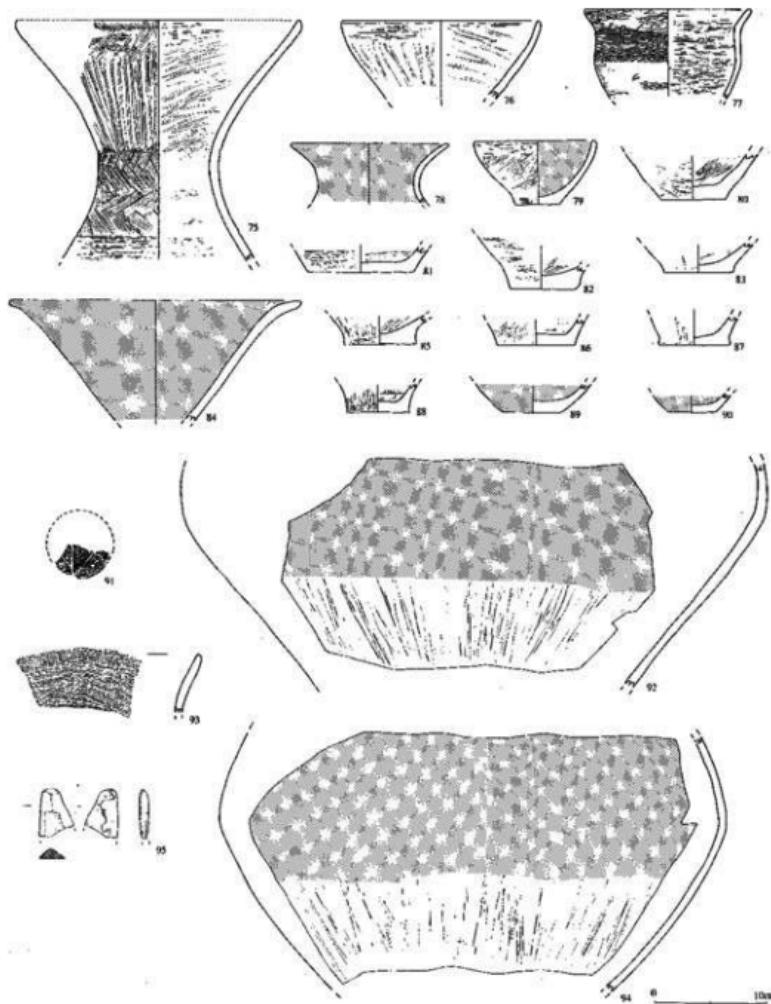
Y4号住居址炉実測図



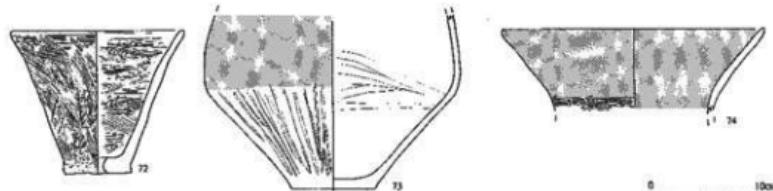
Y5号住居址炉実測図



Y5号住居址実測図



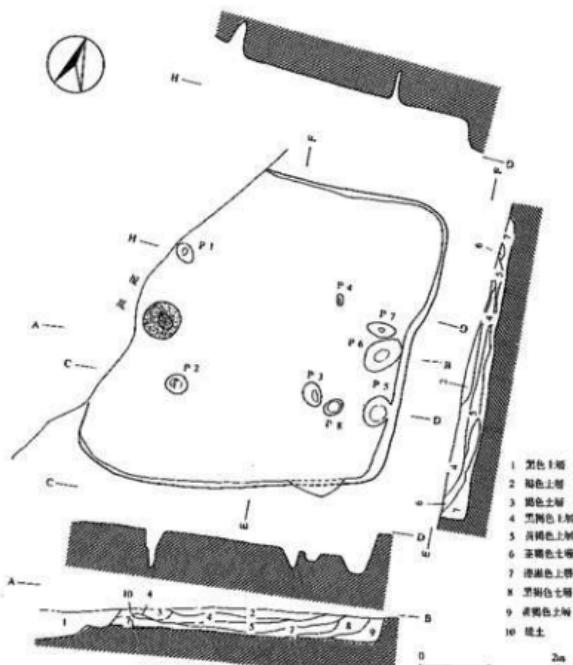
Y5号住居址出土遺物実測図



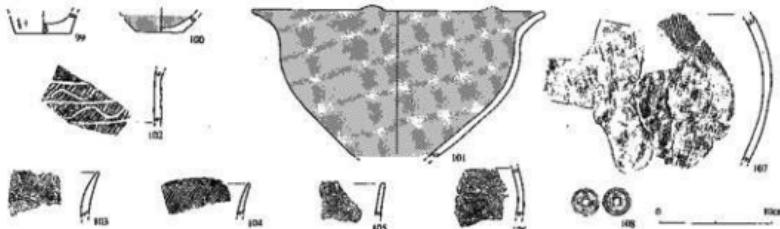
Y 5号住居址出土遺物実測図

#### Y 6号住居址

本住居址は、Y 1号住居址同様烟境にあたり西壁の大半を失っている。平面形態は南壁4.3m東壁4.0mの不整な隅丸方形と考えられる。壁残高は東壁で42cmを測り、長軸方向はS 85° Wを指し、明確に西を指すのは本址のみである。床面は堅固であった。ピットは8個検出され、P1～P4は主柱穴とみられ、台形に配置されている。P1は52cm、P2は57cm、P3は51cm、P4は45cmといずれも深い。P5・P6は、深さ22cmで入口の施設に関連するものであろう。



Y 6号住居址実測図



Y 6号住居址出土遺物実測図

炉は60×50cmの楕円形を呈し、北側の主柱穴間に設置され、高坏の坏部のみが埋設され、炉縁石は持たない。焼土は高坏に接する炉底面にみられた。高坏脚部の位置あたりに相当する炉底面中央には、直径5cm深さ5cmの穴が穿たれており、内部には焼土が認められた。

遺物の出土は、弥生時代後期後半を主体とするが少量であった。壺・鉢・高坏が図示できた。壺は小片で図示不可能である。古銭は江戸時代铸造の寛永通宝である。本住居址は炉に使用された高坏から、弥生時代後期後半に位置づけられる。

#### Y 7号住居址

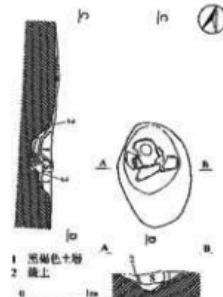
本住居址の平面形態は、北壁3.6m西壁5.0m南壁4.4m東壁5.0mの隅丸長方形を呈し床残高25cm~46cmを測る。長軸方向はN20°Wを指す。覆土第6層は、黄色土(地山)を多量に含むものであるが、Y 8号住居址覆土の第10層に極めて酷似している。床面は全体に堅固で、炉が北側の主柱穴間に設置されている。炉は75×52cmの楕円形で深さ15cmを測り、109と111の壺底部を埋設する土器埋設炉である。109の水平を調整するために、110・114・115の壺底部片と113の壺底部片117の高坏が使用されている。109と111の周および炉縁石の下部には焼土がみられた。

なお、本址の炉縁石とY 7号住居址の炉縁石とが接合する。

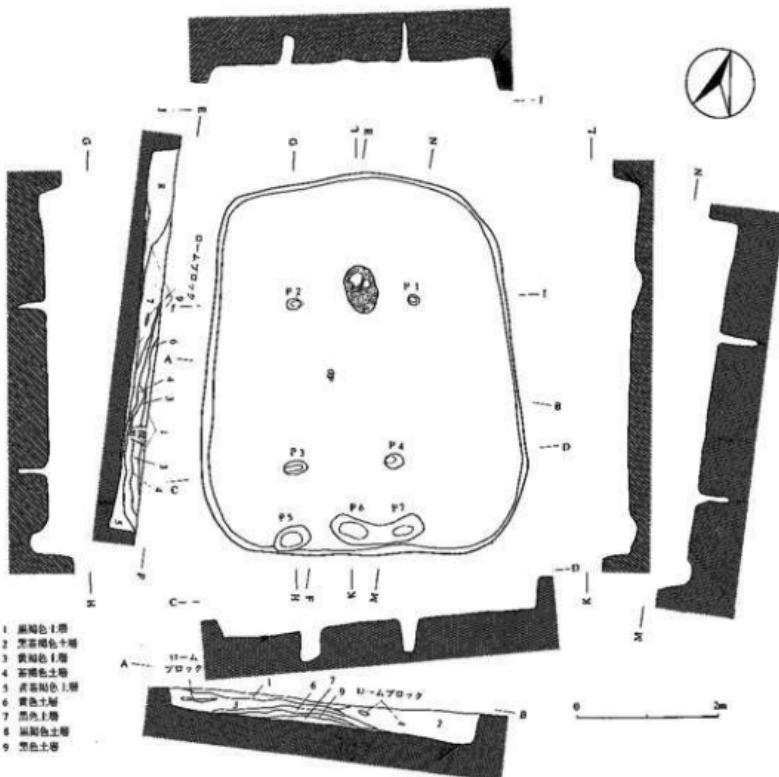
ピットは7個が検出された。主柱穴P1~P4は長方形に配され、P1は60cm P2・P3は40cm P4は50cmの深さである。南壁中央直下に並列するP5・P6は入口に関連するものであろう。深さはいずれも床面より10cmを測る。遺物は炉に使用されていた土器以外は、いずれも小片で図示可能なものは少ない。床面中央から出土した壺底部片112・116以外は、炉に使われた土器である。109の壺外面には灰が付着していた。壺口縁部・胴部には横描波状文(114・118)と横描羽状文(110)がみられる。炉に埋設された土器から本住居址は、弥生時代後期後半に位置づけられる。



Y 6号住居址炉実測図



Y 7号住居址炉実測図

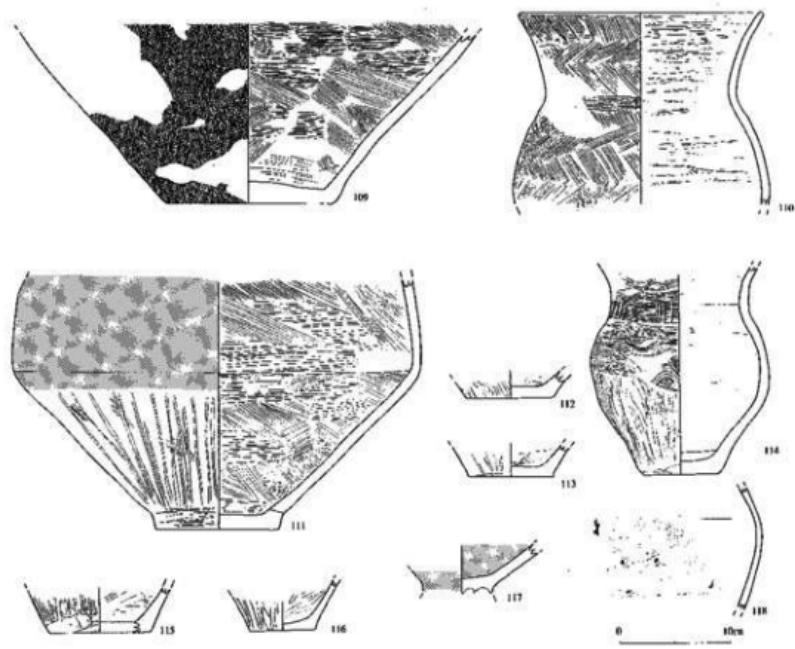


#### Y-8号住居址

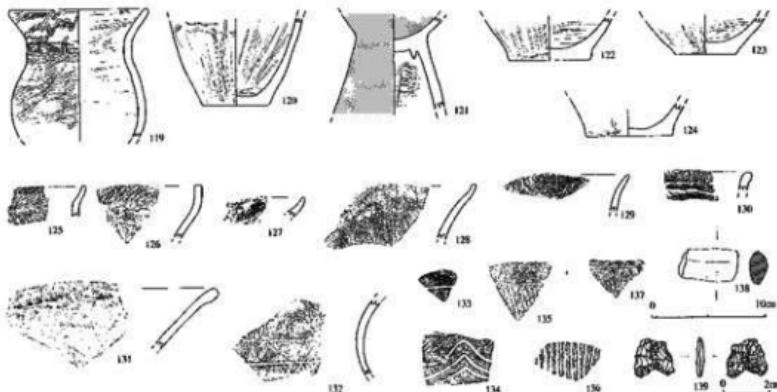
本住居址は、Y-6・Y-1号住居址同様畠境から検出されたため、西壁部分が耕作等により破壊されていた。また、すでに始まっていた圃場整備工事によっても南壁の一部を削平されていた。平面形態は東壁5.8mを測り、柱穴等の状況から隅丸長方形を呈すると考えられる。壁残高は東壁で50cmを測る。長軸方向はN 12°Wを指す。推定される炉の位置は耕作により削平されていたために不明である。

覆土第10層は、黄色土（地山）を多量に含み、Y-7号住居址の覆土第6層・Y-2号住居址第3層に酷似する。

残存する床面は敲きしめられて堅固であった。ピットは6個検出された。北側の一個を欠く



Y7号住居址出土遗物实测图



Y8号住居址出土遗物实测图

ものの、P1～P3の位置から主柱穴は長方形に配されていたと思われる。深さはP1が54cm、P2が40cm、P3が40cmを測る。南壁中央直下に並列するP4・P5は入口に関連するものであろう。

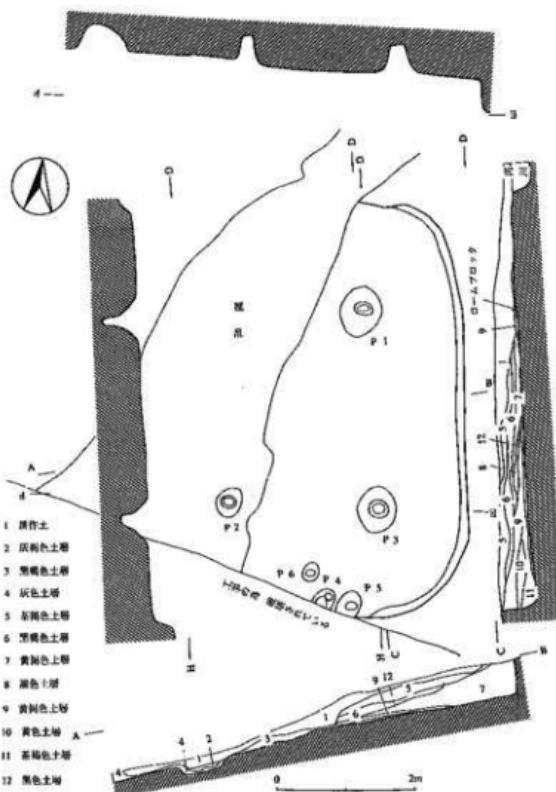
遺物はP1の西側床面から集中して出土した。弥生時代後期後半を主体とし、壺・甕・高杯が図示できた。弥生時代中期後半の土器も少量みられた。138は砂岩の砥石、139は黒曜石の石鎌。甕は口縁部・胴部にくずれた櫛描波状文、頸部に櫛描麻状文を施す(119・120・129)。壺は無彩のもの(128)と赤色塗彩されるもの(13

2・133・135・137)がある。壺の頸部文様には、横走籠描直線文間に矢羽状に(132・133・135)、格子目状(137)に斜走籠描短線文がみられる。131は高杯で口唇部に櫛による刻目がみえる。

以上出土遺物が少量ではあるが、本住居址は弥生時代後期後半に位置づけられよう。

#### Y 9号住居址

本住居址は、Y2号住居址とY5号住居址を破壊しF1号掘立柱建物址に一部を破壊されている。平面形態は北壁4.5m・西壁5.4m・壁残高22cm～34cmを測る。長軸方向はN18°Wを指す。床面は全体に堅固平坦で、北側主柱穴間に炉が設置されている。炉は84×64の楕円形、深さ10cmの地床炉で、炉縁石を持たない。本遺跡で炉が明らかな住居址の中で、地床炉は本住居址のみであ



Y 8号住居址実測図

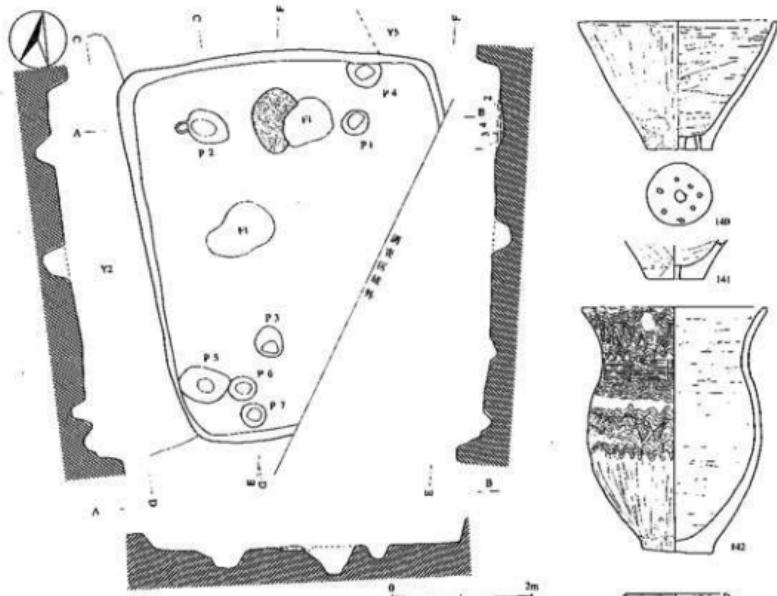
る。底面にはほぼ全面に2~5cmの焼土がみられた。ピットは7個が検出された。南側の一個を欠くものの、P1~P3の位置から主柱穴は長方形に配置されていたと思われる。P1~P3の深さは20cm~30cmである。遺物は壺・甕・鉢・高杯・瓶、紡錘車が出土した。これらは炉の周辺およびP3から西壁隅にかけての床面上から検出された。紡錘車は西壁中央直下の床面上から出土した。壺は胴下部のくびれを残すもの(144)とみられないもの(143)がある。いづれも赤色塗彩される。頸部文様はT字文がみられず、横走櫛描直線文が143・152に認められる。甕は頸部に櫛描縦状文、口縁部と胴部には櫛描波状文(142・151・153)や横櫛描羽状文(150・154)が施される。鉢は内縁口縁で外面赤色塗彩されるもの(145)、内外面赤色塗彩され平底逆台形の形態となろう(147)がある。高杯は円形の一孔(141)と中央に円形一孔とその周囲に直径0.3~0.5cmの小さな複数孔をもつもの(140)とがみられる。156の石製紡錘車は、直径4cm、厚さ1.5cmを測るもので、中央の孔は両面から穿たれている。

これらの出土遺物から本住居址は、弥生時代後期に位置づけられる。

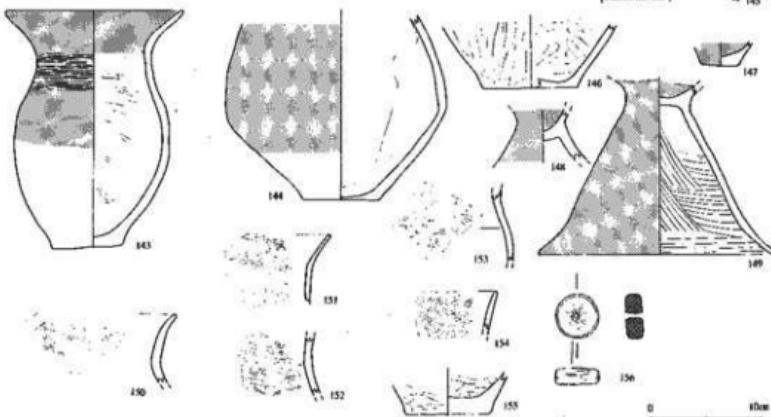
#### Y10号住居址

本住居址は北壁をH1号住居址に、南西隅をH2号住居址に破壊されている。平面形態は、いずれも推定であるが北・南壁4.0m・西・東壁4.8mを測り、隅丸長方形を呈する。壁残高は東壁中央で28cmである。長軸方向はN30°Wを指す。床面は全体に堅固で平坦である。炉は北側主柱穴の間に置かれていた。炉は43cm×33cmの楕円形、深さ15cmで壺・高杯を埋設する土器埋設炉である。炉内の土器は185の高杯を最上部に置き、その下に172の甕を10片以上に割り4重に敷かれていた。南側には炉縁石(河原石)が置かれていた。炉の底面にはほぼ一面に2~5cmの焼土が認められた。ピットは8個検出され、主柱穴P1~P4が長方形に配され、深さ30~52cm。入口に関連するピットP5は深さ30cm、P6は14cmを測り南壁中央直下にある。遺物は炉・P1付近から中央P4・P5にかけての覆土第1~3層から壺・甕・台付壺・鉢・高杯・瓶が大量に出土した。壺は、赤色塗彩され頸部にT字文Cを持つもの(188~190)、無彩(158)、赤色塗彩され口唇部に突起を持つ(162)がある。甕は、頸部に櫛描縦状文口縁部・胴部に櫛描波状文が施される(166・168・173・174・191~193・196)、頸部に櫛描縦状文口縁部に横櫛描羽状文を持つ(195)、無文の(176)がある。瓶は円形の一孔を持つ(157・169)、円形の2孔を持つ(165)がある。床面上からは、187・198の壺と167の甕が出土した。176の炉の甕は、口縁部にくづれ縦櫛描羽状文胴部に横櫛描羽状文最後に頸部に櫛描縦状文。

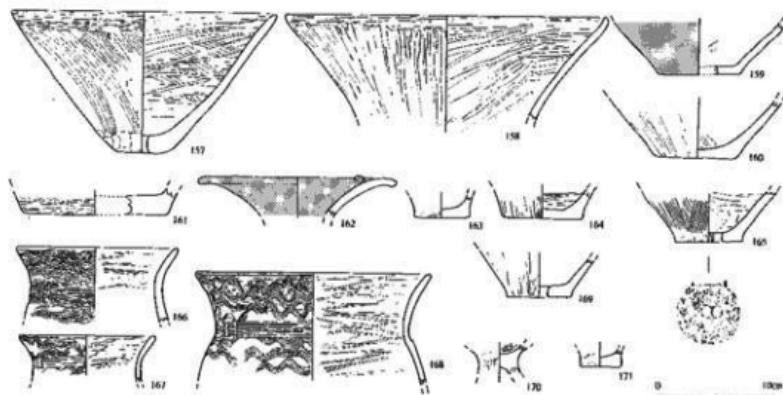
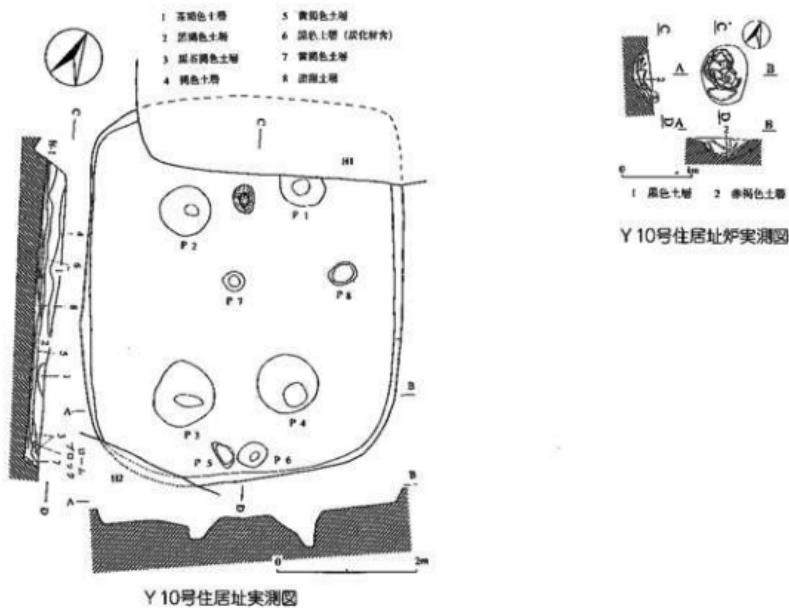
本住居址は、弥生時代後期後半に位置づけられる。

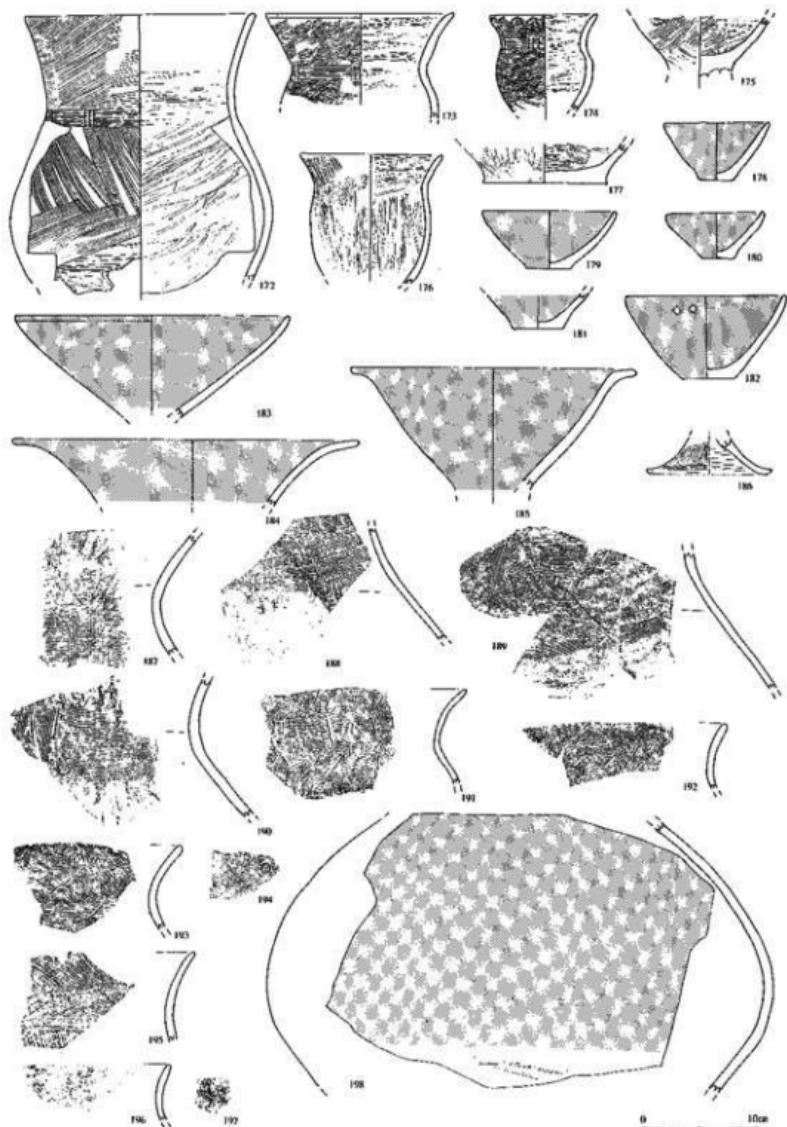


Y9号住居址実測図



Y9号住居址出土遺物実測図





Y10号住居址出土遺物実測図その2

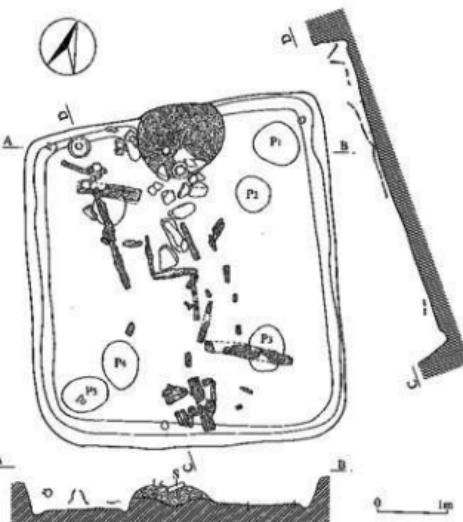
## H 1号住居址

本住居址は、南壁がY 10号住居址を破壊する。焼失住居である。平面形態は北壁4.3m南壁4.3m東壁4.8m西壁4.4mの隅丸方形を呈する。

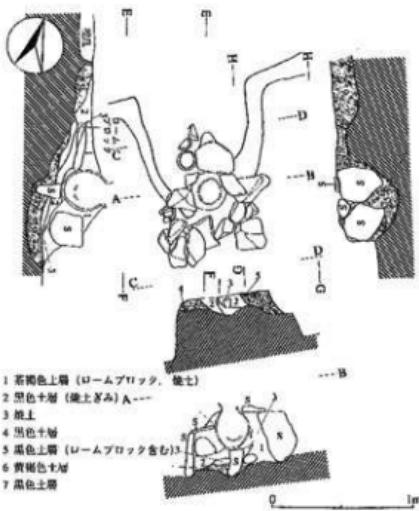
壁残高36~37cm、カマドを中心とする主軸方向はN26°Wを指す。

床面は堅固で平坦である。カマドは北壁のやや東よりに設置されていた。袖部の一部と煙道部の地山を掘り残し、天井部・袖部とともに礫を主体に黒色土で補強・固定している。天井部の礫が相当崩れているため断定はできないが、支脚石は1個であり、蓋一つ架けのカマドであったろうか。204の長脛甕が架けられたままの状態で、検出された。状況から器設部に固定されていたとみるのが妥当である。カマド前面床面上の礫群もカマド構材であろう。ピットは6個検出され主柱穴P1~P4が方形に配されP1・P4が60cm、P2が80cm、P3が20cmを測る。P1・P2・P4は西に向けて15°~20°傾斜した掘り方であり、上屋構造が特殊なものとなるのだろうか。P5・P6は深さ15cmを測る。周溝が巡る。

炭化材は床面より僅かに浮いた状態で出土し、主柱穴を結ぶ範囲から多く検出された。ほとんどが垂木であろうか。

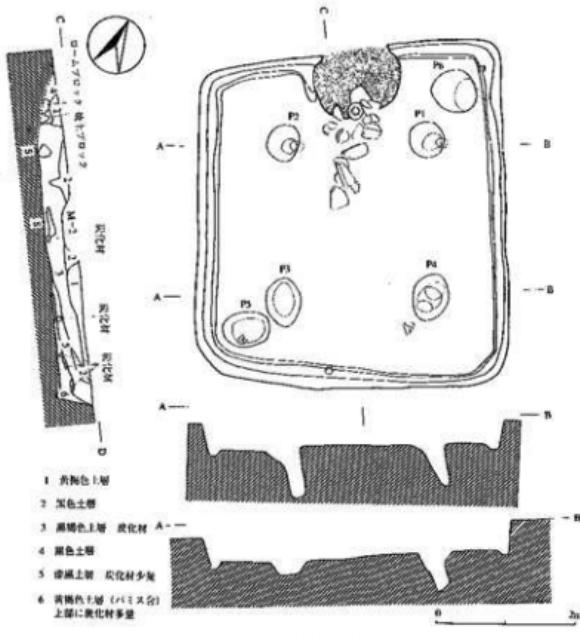


H 1号住居址炭化材分布図



H 1号住居址カマド実測図

出土遺物には、土師器瓶・壺・小形甕・杯・椀・辯・高環、須恵器环身、土製勾玉がある。203の甕、215・217・219・220の杯、224の辯は明らかに炭化材より下から出土した。204の甕はカマドに架かったままの状態で、さらにこの甕の内部より221の杯が出土した。207の甕・222の須恵器环身はカマド内から検出された。218の杯はP1内、225の高環はP3内よりそれぞれ出土している。212・206・209・211

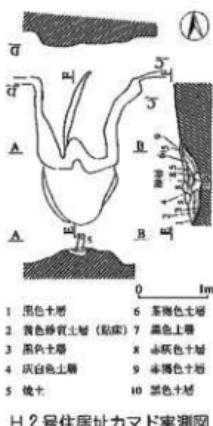


H 1号住居址実測図

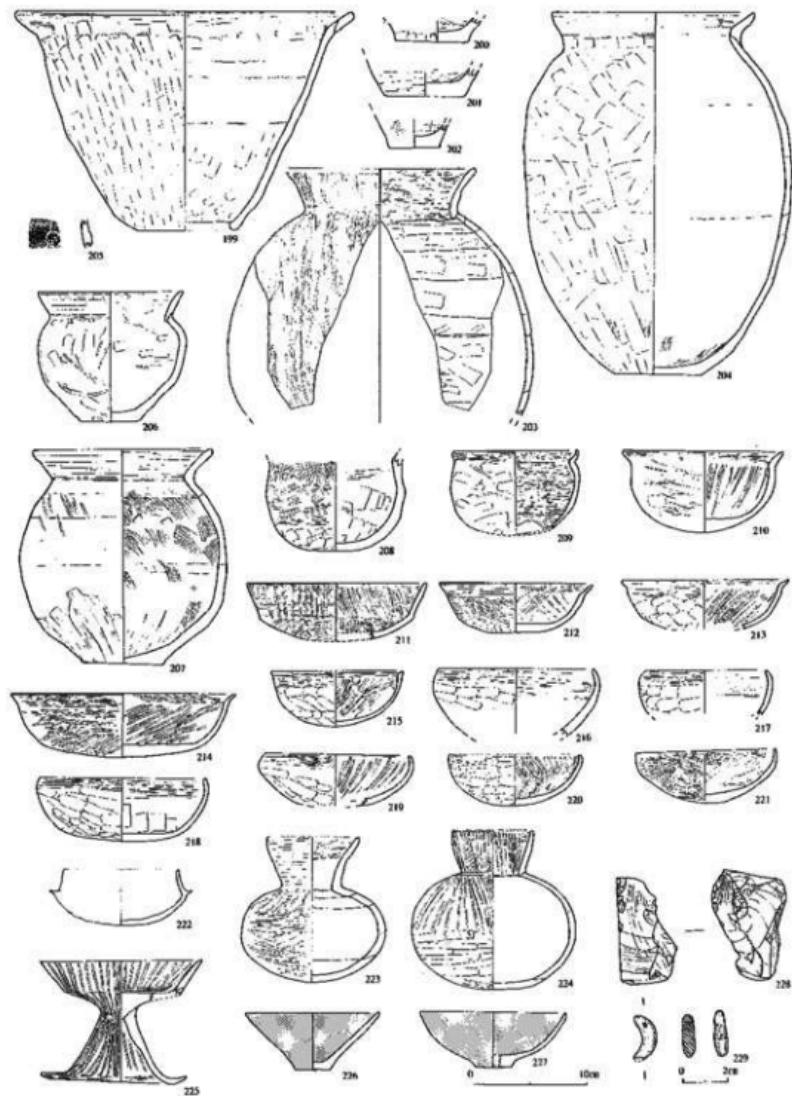
は床面上からの出土である。222の須恵器环身は、T K47段階併行。本住居址は、古墳時代後期前葉(6世紀初頭)に位置づけられよう。

## H 2号住居址

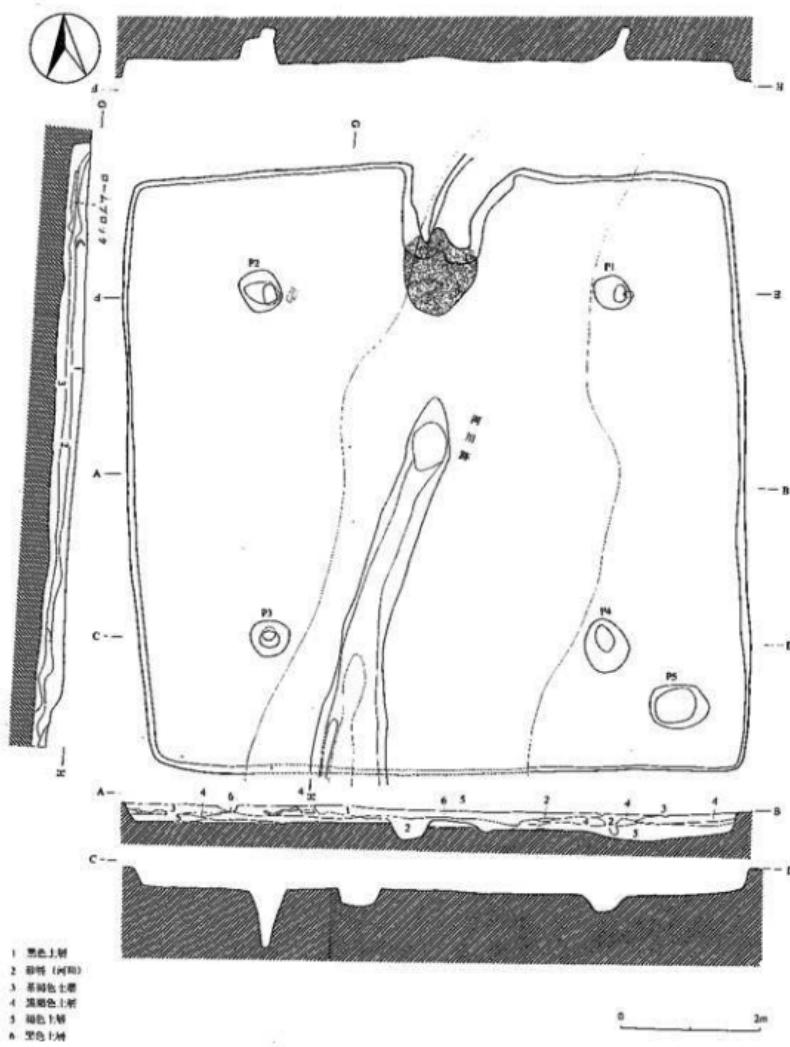
本住居址は、焼失住居である。住居址のほぼ中央を小河川が流れおり、中央の炭化材が流失している。北壁の一部がY 10号住居址を僅かに破壊している。平面形態は北壁8.6m南壁8.3m西壁8.3m東壁8.4mを測る隅丸方形を呈する。壁残高は西壁で31.5cm。カマドを軸とする主軸方向はN 1°Wを指す。河川に床を抉られている部分以外の床面は堅固であった。カマドは北壁のほぼ中央に設置されている。小河川によって大部分が消失し、僅かに燃焼部下部の黒色の構築土と焼土がうかがえるだけである。袖部及び煙道部は地山をあらかじめ掘り残している。この構築の方法はH 1号住居址と同様である。ピットは5個検出された。主柱穴P 1～P 4は方形に配され



H 2号住居址カマド実測図



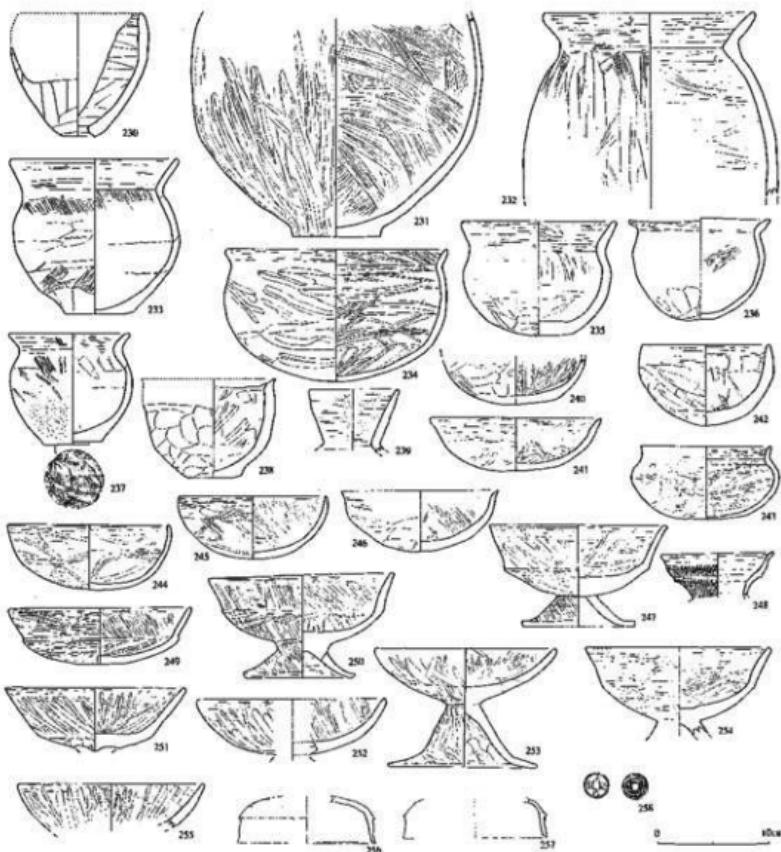
H 1号住居址出土遺物実測図



H 2号住居址实测图

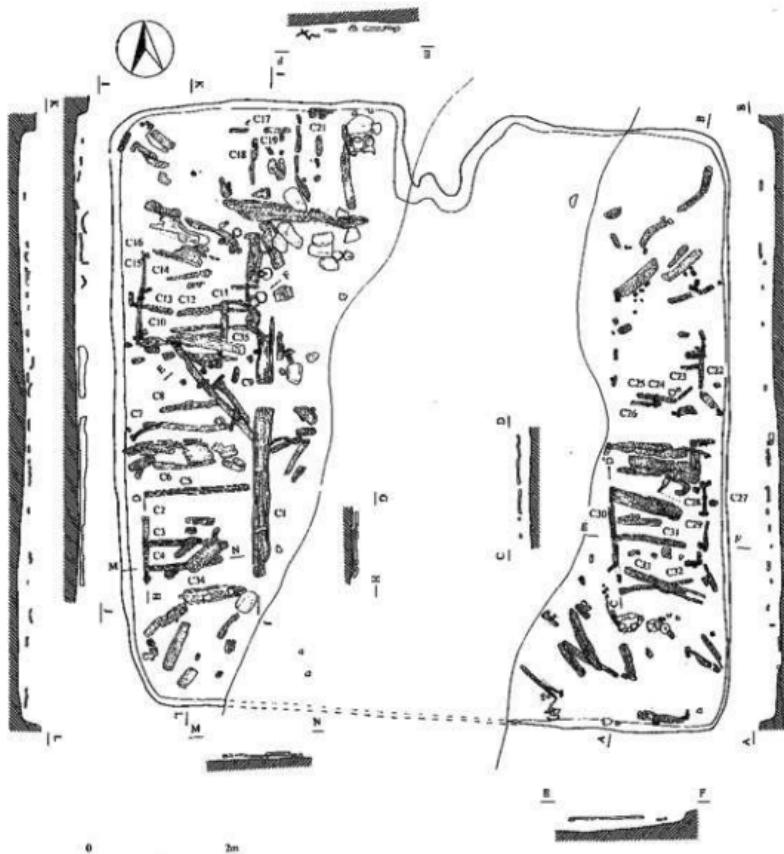
る。P1の深さは47cm、P2は51cm、P3は84cm、P4は29cmを測る。P1およびP2の掘り方はH1号住居址に似て、P1は20°、P2は10°西に傾いている。P5は84cmと深い。

遺物は土師器蓋・小形甕・壺・椀・高壺・瓶、須恵器壺蓋・ハソウがある。249は河川からの出土。250・251はT字K47式段階併行。



H2号住居址出土遺物実測図

炭化材は良好な状態で検出されたが、河川で上屋中央部の大部分を失っている。西側の中央よりは床面に接するか僅かに浮き、壁よりは10~15cm浮いている。主柱穴の位置の真上にあるC1は、朽材と考えられるが、炎上する際に主柱穴は存在したのだろうか。C4~C32は状況から壁材とみられ、垂木(C33~C35)がその上に乗る。C30・C31・C2~C3には、「欠き込み」が窺える。垂木には幅広のものが多く、幅30cmを測る板状のものがある。



H2号住居址炭化材分布図

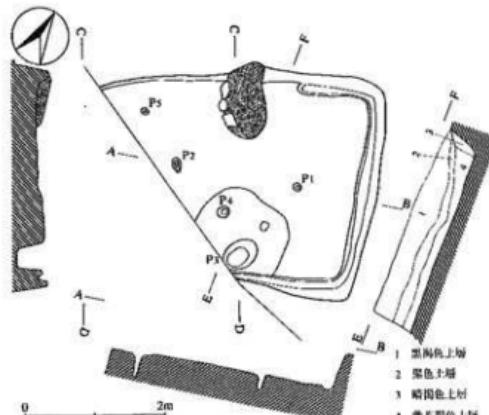
### H 3号住居址

本住居址はすでに圃場整備の工事により西壁と南壁の一部が破壊されていた。本調査の契機となった住居址である。H 1・H 2号住居址と同じく焼失住居である。

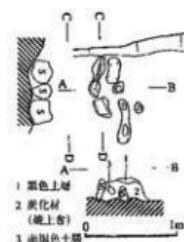
北壁の残存長は4.1m、東壁は3.2mを測る。平面形態はカマドを軸とする主軸が短い鵝丸長方形と推定できる。壁残高は東壁で54cm、カマドを軸とする主軸方向はN24°Wを指す。床面は平坦で堅固でありよく継まっている。カマドの東脇からP3にかけて、幅10~20cm深さ10cm前後の周溝が巡る。

カマドは北壁のほぼ中央に構築されていた。ほとんど壊れていて、西側袖部のカマド構材である角礫(多孔質集塊岩)3個と支脚石(黄色砾石)1個が残るのみであった。東側にも小ピットがみえ、袖石の存在を窺わせる。燃焼部から屋外への煙道部にかけての掘り込みは、浅い。ピットは5個が検出された。南北壁に平行してあるP1とP2は、位置と形状から主柱穴とみられる。1の深さは22cm、P2は40cmを測る。P5は南壁に接してあり、深さ50cmで直径60cmを測る円形を呈する。周辺を5cmほど床面より高くしてあり、覆い蓋の存在を窺わせるものである。内部からは、土師器がほぼ完形に近いものを含めて6個体出土している。貯蔵穴と考えられる。

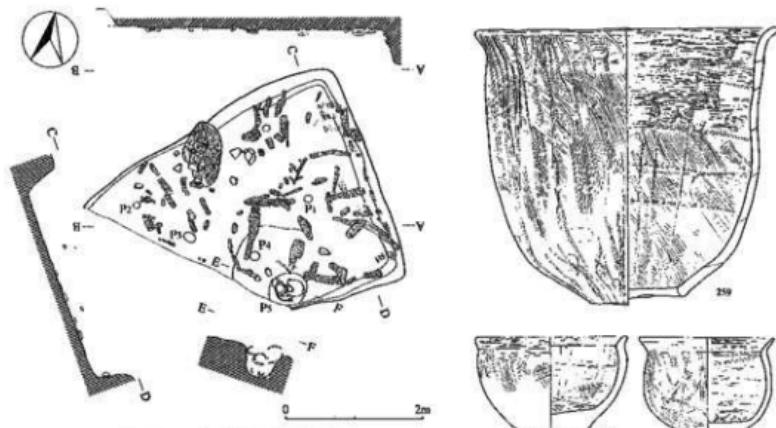
炭化材は、ほぼ住居全体から出土している。壁外から焼け落ちている炭化材もあり、住居が崩壊もしくは破壊された後での消失ではないことが窺える。壁から床に伸びるもの以外は、床に密着している。覆土がほとんど堆積しないうちにおいての燃焼である。大部分が放射状に分布しており、垂木と思われる。すると、上屋は寄せ棟を想定できる。東面の垂木の上に北面、さらに、北面の上に南面という炭化材の重なり状況がみえる。垂木と直交するものも少量認められるが、



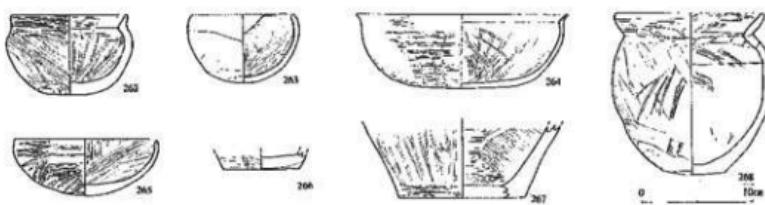
H 3号住居址実測図



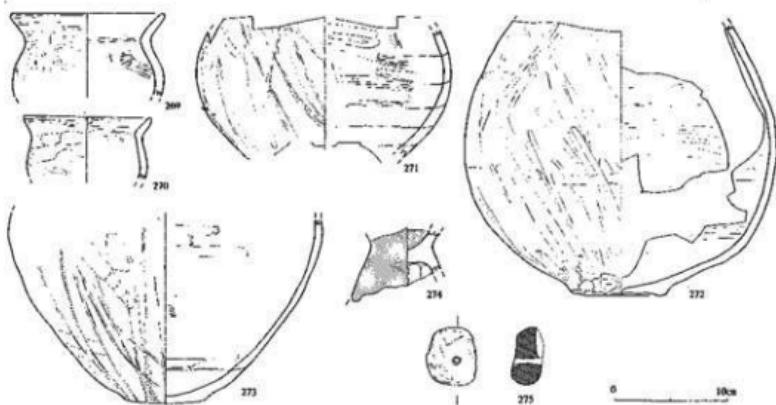
3号住居址カマド実測図



H3号住居址出土炭化材分布图



H3号住居址出土遗物实测图



H3号住居址出土遗物实测图

横木であろうか。茅状の炭化材が東壁付近の壁や床面上に接してみられた。前者は壁材または屋根を葺いたものであろうか、後者は床に敷かれたものであろうか。

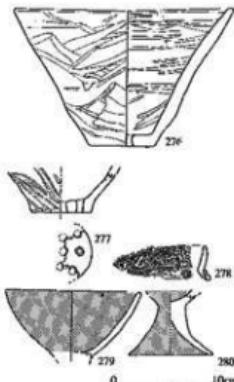
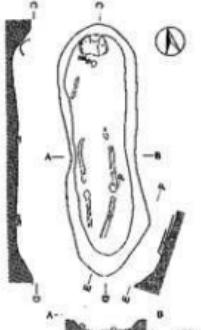
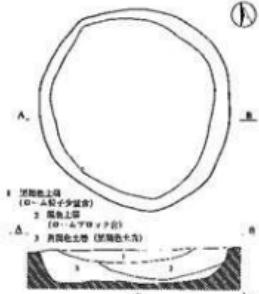
遺物は土師器を中心とするが、そのほとんどが貯蔵穴と思われるP5内および炭化材の下の床面から出土した。図示したものには、土師器壺・小形壺・壺・楕・瓶、石製の紡錘車、弥生時代後期の壺・高壺がある。胴部下位に膨らみを持つ一孔の瓶(259)、壺(272)、楕(260・261)、小形壺(268)がP5内から、壺(273)・壺(265)・楕(262)がカマド周辺の床面から、他は壺第1層・2層からの出土である。本住居址は、古墳時代後期初頭に位置づけられる。

#### D 1号土坑

本址は調査区北東隅から検出された。南北1.85cm東西1.77cmの円形を呈し、深さ30cm。底面は、ほぼ平坦で軟弱である。遺物は弥生時代後期後半の円形一孔を持つ瓶(276)、複数孔を持つ瓶(277)、円形貼付文を持ち櫛描波状文の台付壺、小形の高壺が出土した。

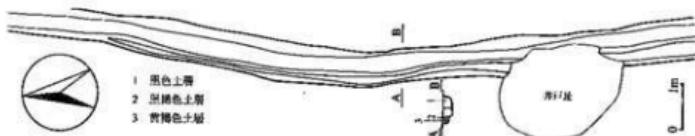
#### D 2号土坑

本址はY3号住居址を破壊している。底面に接して人骨頭部・腕・腰部・脚が出土した。副葬品はない。遺存身長150cmを測る。



#### M 1号溝状造構

本址はY3号住居址を破壊し、井戸址に一部を破壊されている。幅75cm～120cm、深さ35cm内外で、流水の痕跡はない。底面は、北から緩やかに南に向けて傾斜している。



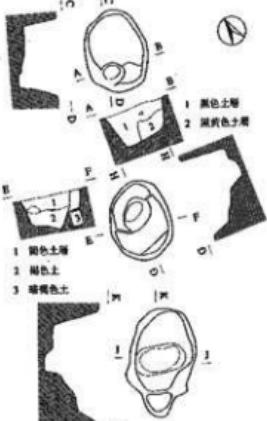
M1号溝状遺構実測図

#### F1号掘立柱建物址

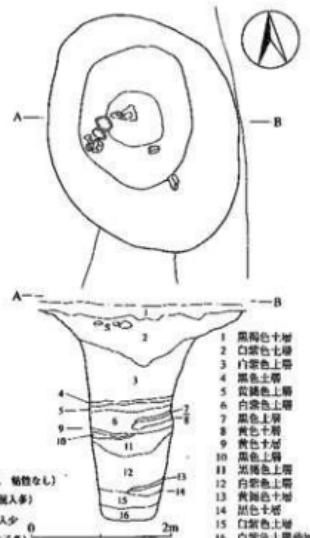
本址はY5号・Y9号住居址を破壊している。P1～P3は、1.15～1.20m×90cmの楕円を呈し、深さ60・80・75cmを測る。桁行4.5mある。

#### 井戸址

本址はY3号住居址と溝状遺構を破壊している。底径0.8m深さ3.0mを測る。覆土は黄土・白紫色の地山の土と黒褐色土・黒色土が互層を成しており、人為的に埋められた堆積状況をみせている。



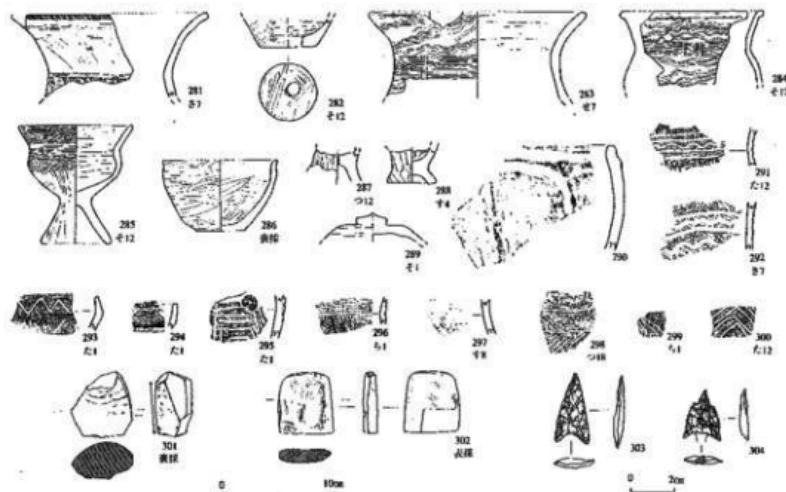
F1号掘立柱建物址実測図



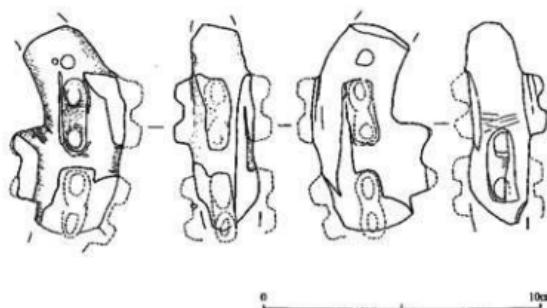
井戸址実測図

#### グリッド及び表探遺物

遺構外から出土および表探された土器には、縄文時代中期後半の深鉢(290)・弥生時代中期後半の壺(281・291～294・300)・甕(295・296)・弥生時代後期前半もしくは後半の壺(297～299)・弥生時代後期後半の甕(283・284)・台付甕(285・288)・瓶(282)・古墳時代前期の碗(286)・器台(287)・平安時代の須恵器蓋(289)がある。磁石(302)や石鏡(303・304)も出土。



グリッド出土・表採遺物実測図



円正方遺跡群表面採集の子持勾玉

この子持勾玉は、佐久市岩村田の中沢義一郎氏によって表面採集されたものである。

現存長7.5cmを測る大形の勾玉に、2cmの小形の勾玉を腹に1個、背に2個、両側面に2個ずつ付着した形に作られている。滑石製である。

子持勾玉は、祭祀用具の一種で石製模造品と同時によく使用されることが多く、古墳時代中期に多くみられる。



清水田遺跡遺構全景（西より）



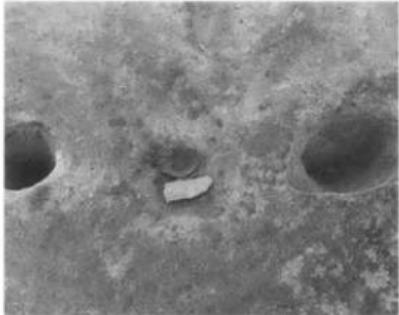
Y1号住居址（南より）



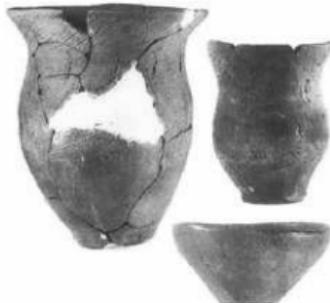
Y1号住居址出土土器



Y2号住居址（西より）



Y2号住居址炉（南より）



Y2号住居址出土土器



Y3号住居址（北より）



Y3号住居址炉（東より）



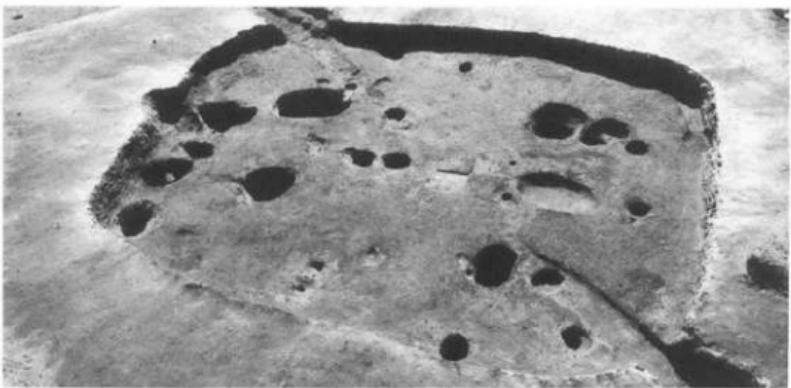
Y3号住居址出土土器



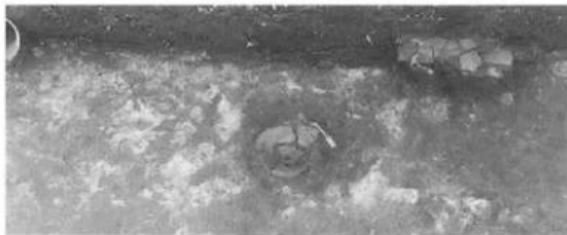
Y3号住居址出土土器



Y4号住居址炉（南より）



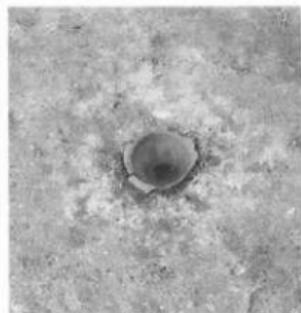
Y4号住居址（北東より）



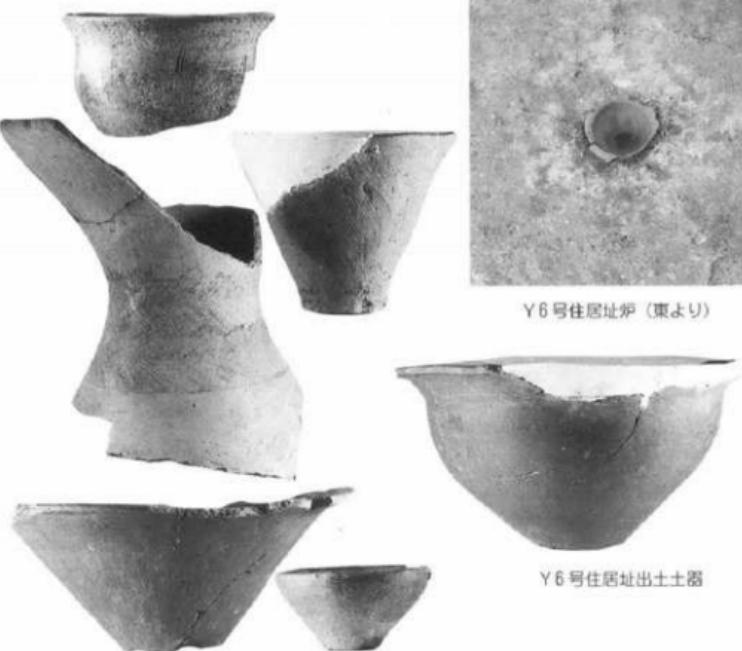
Y5号住居址炉（西より）



Y5号住居址（西より）



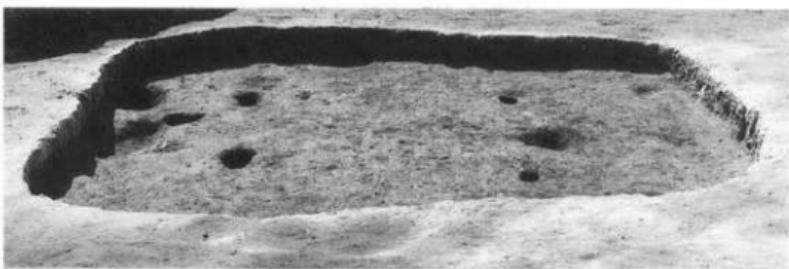
Y6号住居址炉（東より）



Y5号住居址出土土器



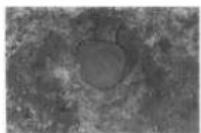
Y6号住居址（北より）



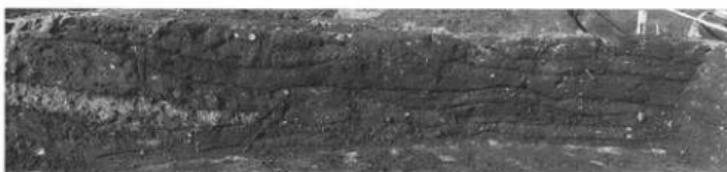
Y7号住居址（東より）



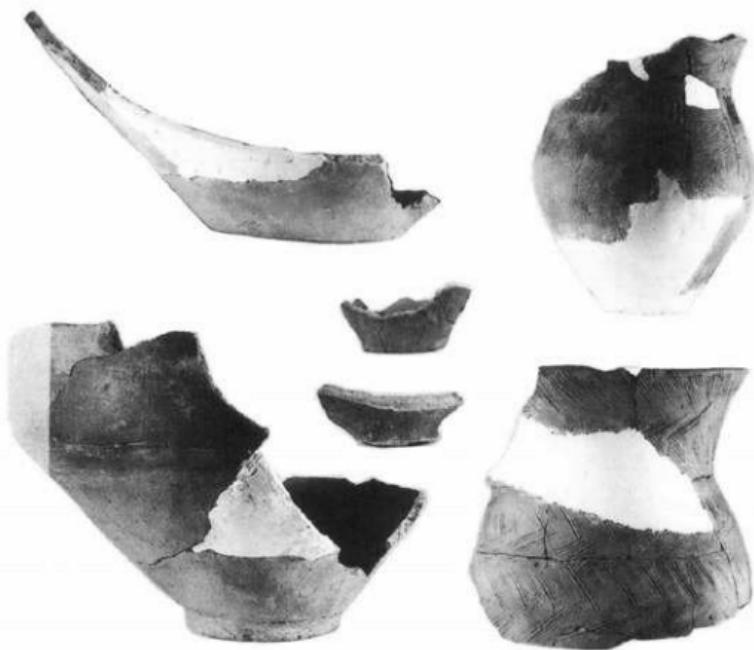
Y7号住居址（東より）



Y7号住居址炉（東より、炉最下部の土器）



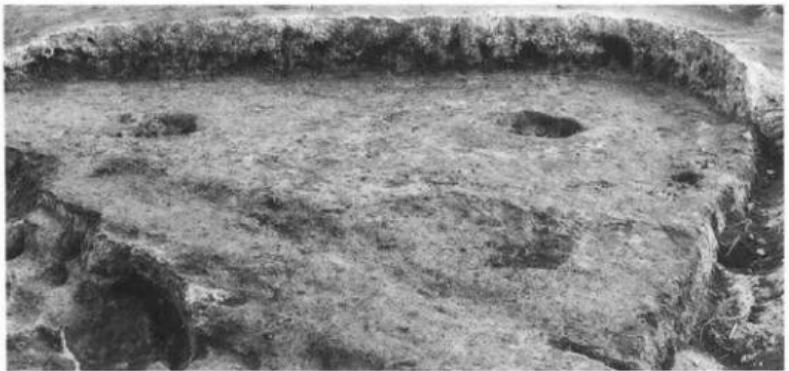
Y8号住居址土層（東より）



Y7号住居址出土土器



Y8号住居址出土土器



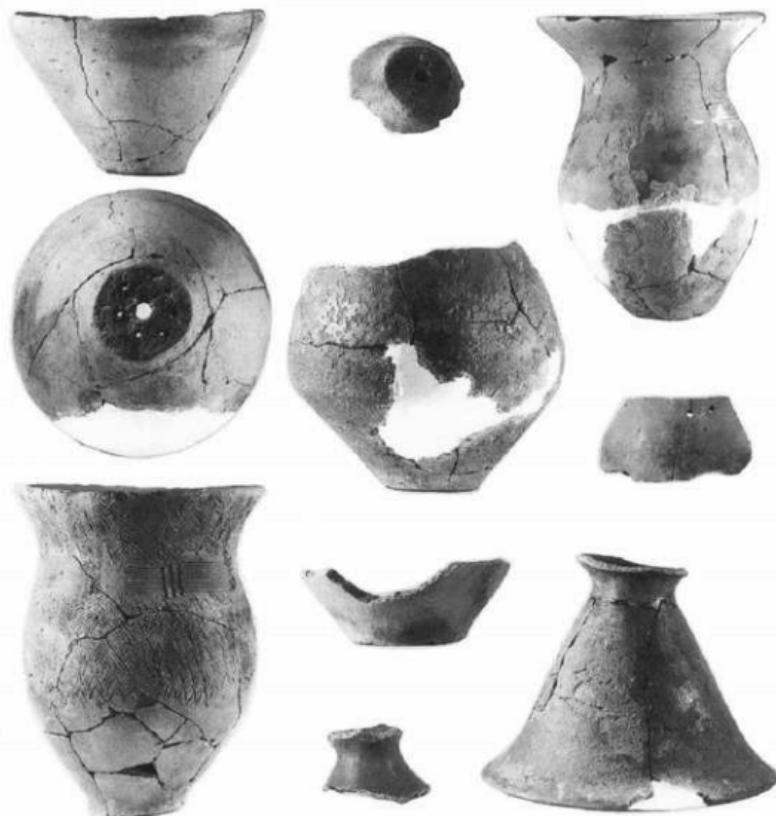
Y8号住居址（西より）



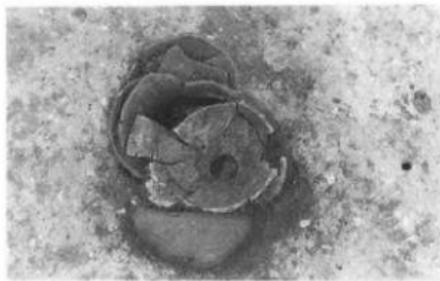
Y9号住居址（北より）



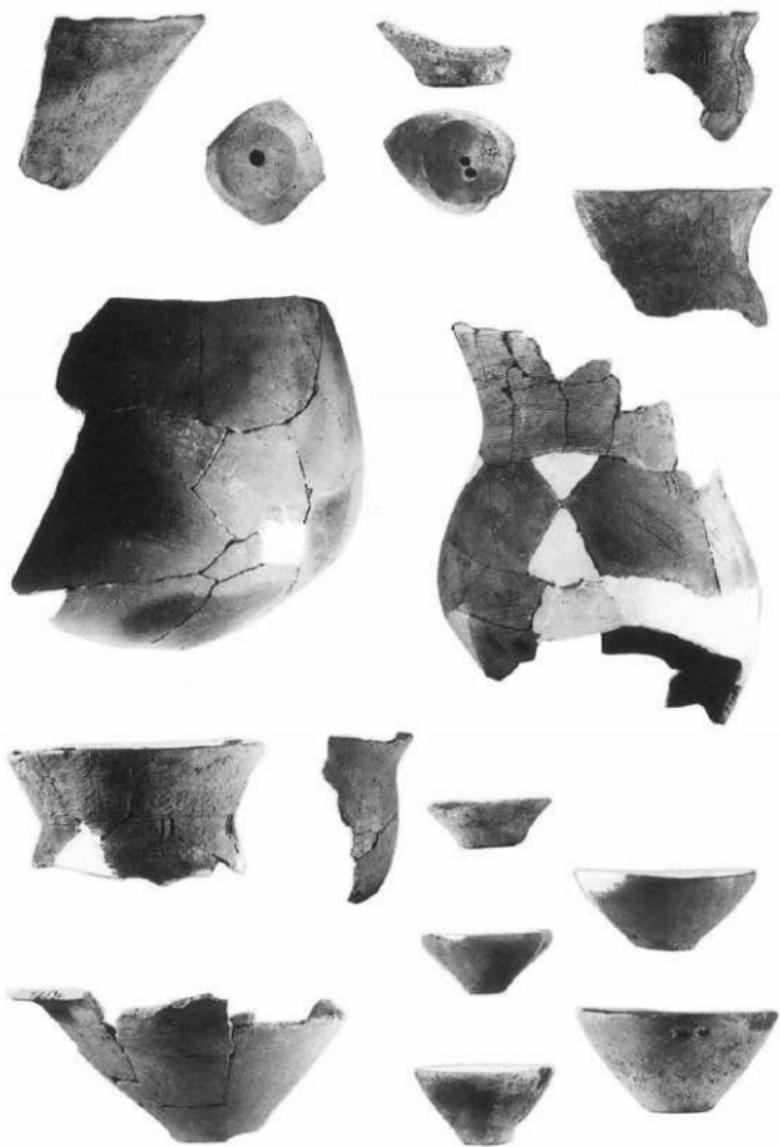
Y10号住居址（東より）



Y9号住居址出土土器



Y10号住居址炉（南より）



Y10号住居址出土土器



H1号住居址出土炭化材出土状態（南より）



H1号住居址出土土器



H1号住居址出土土器



H1号住居址遺物出土状態（南より）



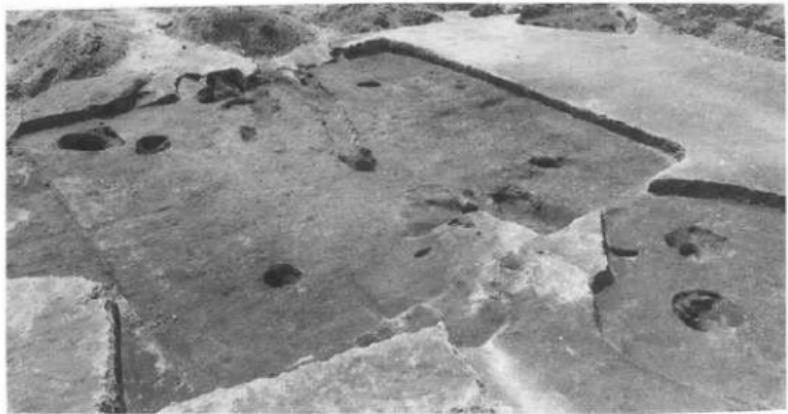
H1号住居址カマド周辺遺物出土状態（南より）



H1号住居址カマド内出土の壺（西より）



H2号住居址出土土器



H2号住居址（北東より）



H2号住居址炭化材出土状態（北東より）



調査スナップ



調査スナップ



H2号住居址出土土器



H2号住居址 II・III区炭化材出土状態（北より）



H2号住居址 II区炭化材出土状態（南東より）



H2号住居址Ⅲ区炭化材出土状態（東より）



H2号住居址Ⅲ区炭化材出土状態（西より）



H2号住居址Ⅱ・Ⅲ区炭化材出土状態  
(南より、朽材)

上図版の拡大（欠き込み部分）



H2号住居址 I・IV区炭化材出土状態（西より）



H2号住居址 I・IV区炭化材出土状態（北より）



H2号住居址Ⅳ区の炭化材出土状態（東より）



H2号住居址Ⅱ区炭化材・土器出土状態（東より）



H2号住居址Ⅳ区炭化材出土状態（東より）



H3号住居址（南西より）



H3号住居址炭化材出土状態（南西より）



H3号住居址P3内遺物出土状態（西より）



H3号住居址出土土器



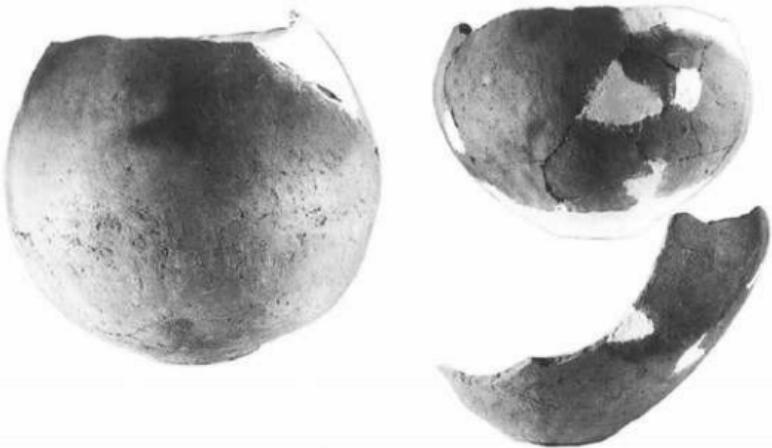
H3号住居址床面茅状炭化材出土状態（南より）



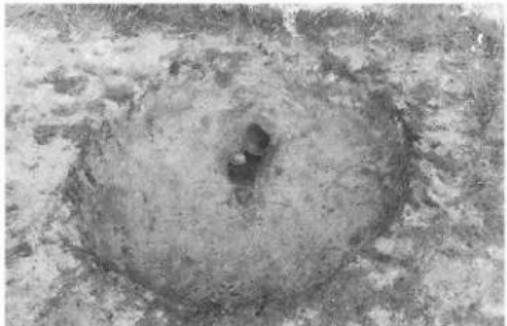
H3号住居址東壁面茅状炭化材出土状態（西より）



D2号土坑（西より、人骨出土状態）



H3号住居址出土土器



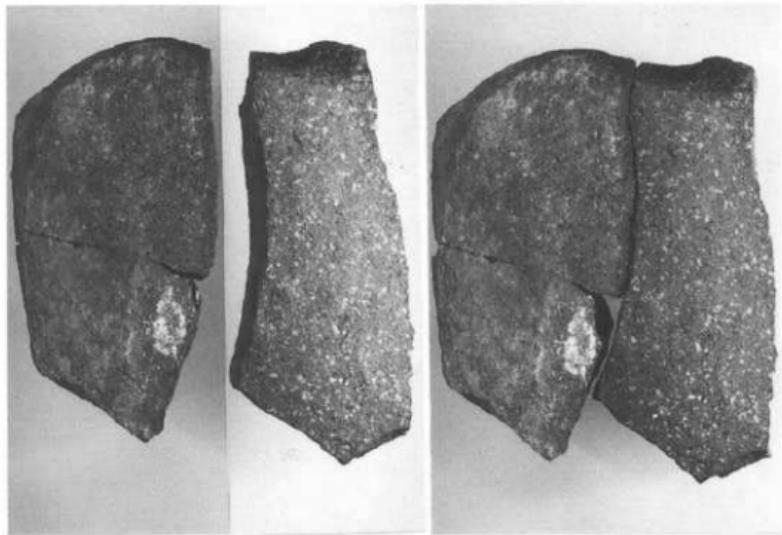
D1号土坑（東より）



撊立柱建物址（南より）



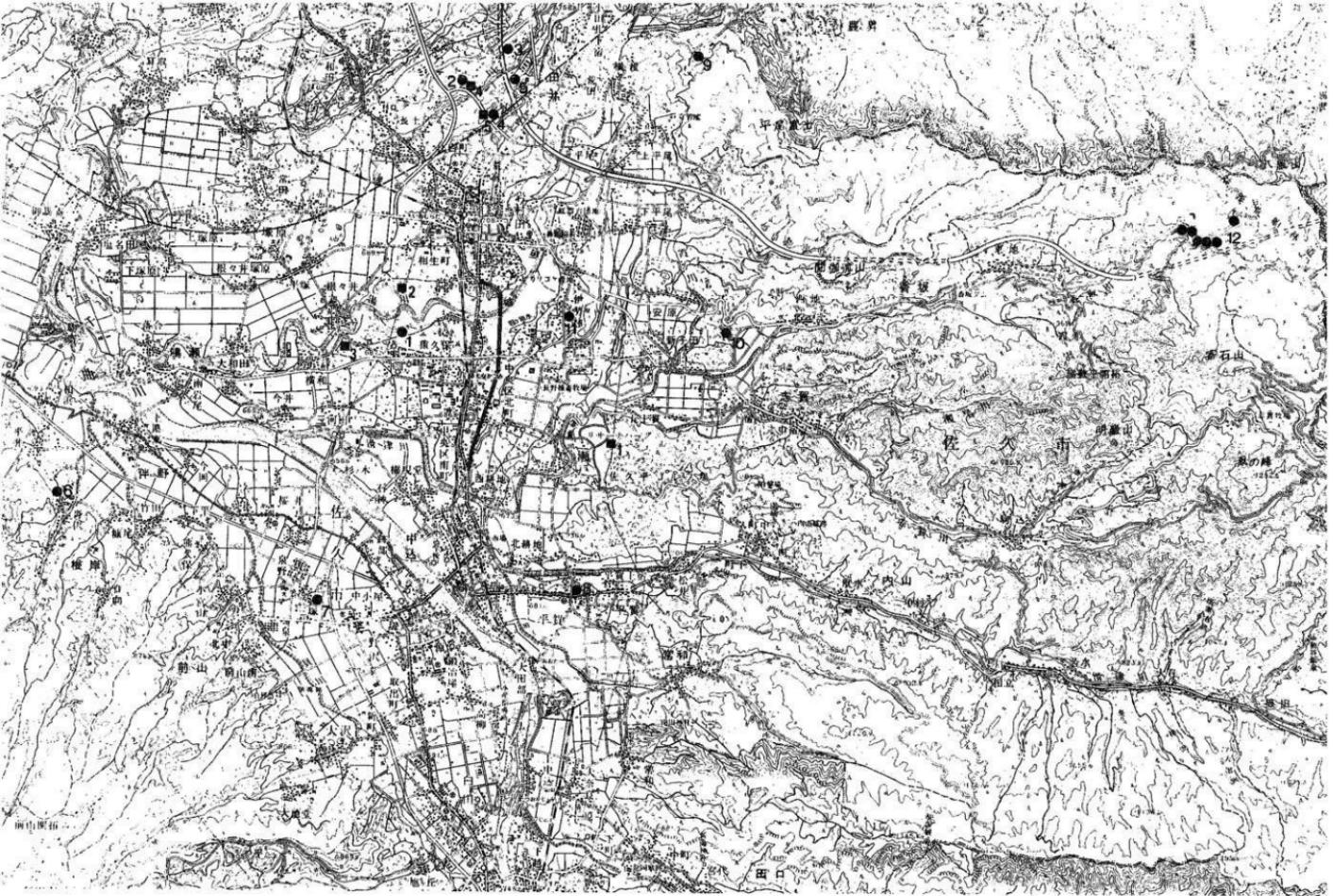
井戸址（北より）



Y4号住居址およびY7号住居址炉の綠石（輝石安山岩）  
左—Y7号住居址、中—Y4号住居址、右—両綠石の接合状態



調査団



平成6年度 調査道路位置図 (●飛揚調査 ■整理調査 番号はII事業の表に対応)

**佐久市埋蔵文化財 年報 4**

**－平成 6 年度－**

**1996年 3月 31 日**

**編集・発行 佐久市教育委員会**

〒384-01 長野県佐久市大字中込3,056

**埋蔵文化財課**

〒385 長野県佐久市大字志賀5,953

**TEL (0267) 68-7321**

**印 刷 株式会社 COX**

